

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第73輯

吉井遺跡

府宮岸和田春木第2期住宅(建て替え)建設工事に伴う発掘調査報告書

1992.3

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第73輯

吉井遺跡

府営岸和田春木第2期住宅(建て替え)建設工事に伴う発掘調査報告書

1992.3

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

序 文

吉井遺跡は、岸和田市吉井町にある古代～中世の集落址です。

今回の調査は、大阪府建築部が進めている岸和田春木第2期住宅（建て替え）建設工事に先立つものです。

この調査では、当初の予想に反して、弥生時代や古墳時代の遺構が検出され、また、墨書のある曲物桶や木簡などの珍しい中世の遺物も出土しました。これらの遺構・遺物は、当地域の歴史を解明していく上で、欠けがえのない貴重な資料となるものと確認されます。

本調査を実施するにあたって、大阪府教育委員会、大阪府建築部住宅建設課、岸和田市教育委員会、地元自治会など、関係者各位に多くのご支援とご協力を賜り、深く感謝しております。今後とも、当協会の事業に変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成4年3月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 伴 恭二

例 言

1. 本書は、岸和田市吉井町地内に所在する大阪府営岸和田春木第2期住宅（建て替え）建設工事に伴う吉井遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府建築部住宅建設課の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 調査は、当協会技師西口陽一が担当した。
4. 現地調査は、平成3年7月に開始し、同年12月に終了した。引き続き、整理作業を開始し、平成4年3月、本書の刊行をもって終了した。
5. 調査方法は、当協会の『発掘調査規程』（昭和61年）に基づいて、国土座標VI系による3級基準点をもとに、地区割りを設定した。図中の方位は座標北を示し、標高は、O. P. で示した。
6. 遺構については、当協会の『発掘調査規程』に基づいて、検出した順に番号をふり、種類については、その後ろに略号を示した。本報告で取り扱う略号は、下記のとおりである。
OO：土坑 OP：ピット OS：溝 OW：井戸
7. 本書で用いた土壌色は、小川正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』5版（1976年）による。
8. 本書で用いた写真は、遺構を西口が、遺物を小倉 勝が撮影し、現像・焼き付けは、すべて小倉 勝が担当した。
9. 本書の執筆・編集は、西口が担当した。なお、本書第II章は、当協会調整係長藤田憲司が執筆した。第9図・第10図の曲物桶実測図作製については、当協会技師西村 歩が担当した。

目 次

序文	
例言	
第I章 遺跡の位置と環境	1
第II章 調査に至る経過	3
第III章 調査結果	4
第1節 調査経過と調査方法	4
第2節 基本層序	5
第3節 遺構と遺物	6
1. 1区	6
2. 2区	13
3. 3区	16
4. 4区	17
5. 5区	18
6. 6区	21
7. 7区	22
8. 8区	22
9. 9区	22
第IV章 まとめ	24

挿 図 目 次

第1図 吉井遺跡位置図	1
第2図 吉井遺跡周辺遺跡分布図	2
第3図 調査区位置図	3
第4図 調査区地区割図	4
第5図 3区南東隅断面図	6
第6図 1区平面図	7
第7図 1区井戸1・井戸2平面図・断面図	8
第8図 1区井戸1出土木器実測図	9
第9図 1区井戸1出土曲物桶実測図	10
第10図 1区井戸1出土曲物桶実測図	11
第11図 1区井戸1出土土器実測図	12
第12図 2区平面図	14

第13图	2区・3区・4区出土土器実測图	15
第14图	4区土坑群平面图・断面图	18
第15图	4区・5区・6区出土土器実測图	19
第16图	2区～7区出土石器実測图	20
第17图	7区・8区・9区平面图	23
第18图	吉井遺跡遺構概念图	25

图版目次

图版1	吉井遺跡周边航空写真	图版19	6区遺構
图版2	1区遺構	图版20	7・8区遺構
图版3	1区遺構	图版21	8・9区遺構
图版4	1区遺構	图版22	1区床土層・土坑1出土土器
图版5	2区遺構	图版23	1区井戸1出土土器
图版6	2区遺構	图版24	1区井戸1出土土器
图版7	3区遺構	图版25	1区井戸1出土木器
图版8	3区遺構	图版26	1区井戸1出土木器
图版9	3区遺構	图版27	1区井戸1出土木器・井戸2出土土器
图版10	3区遺構	图版28	2区床土層・溝1出土土器
图版11	4区遺構	图版29	3区床土層出土土器
图版12	4区遺構	图版30	4区床土層出土土器
图版13	4区遺構	图版31	4区床土層・包含層出土土器
图版14	5区遺構	图版32	5区床土層・包含層出土土器
图版15	5区遺構	图版33	6区床土層出土土器
图版16	5区遺構	图版34	6～9区床土層出土土器
图版17	6区遺構	图版35	3～6区出土漁具・製塩土器
图版18	6区遺構	图版36	2～7区出土石器

表 目 次

第1表	調査区一覧表	5
第2表	遺構一覧表	26
第3表	出土遺物観察表	30

付 図 目 次

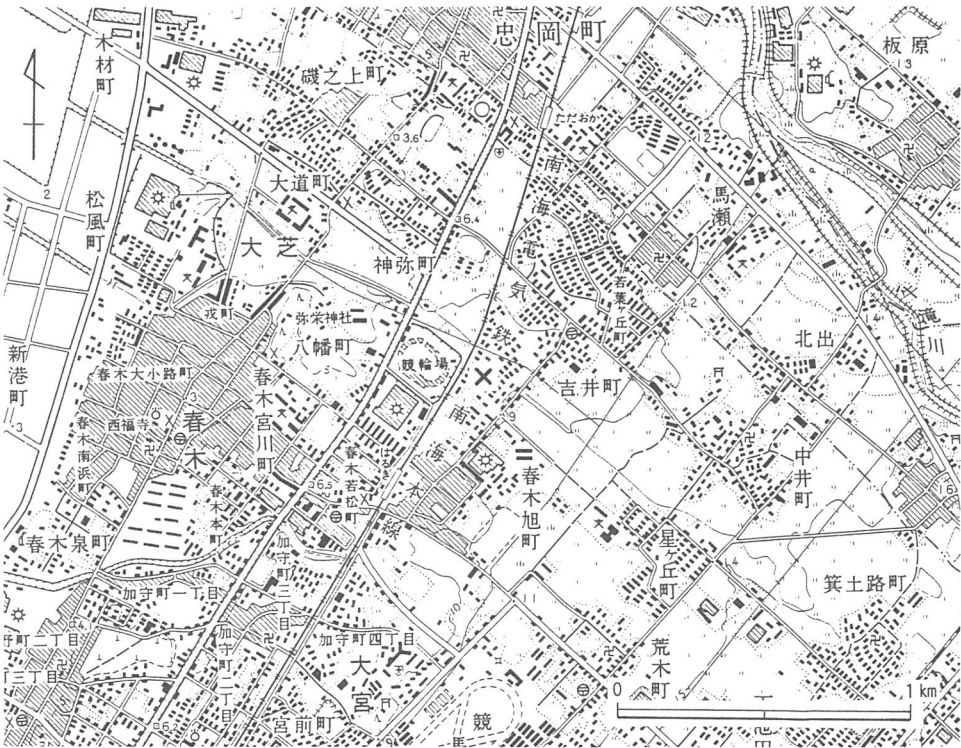
付図1	3区・4区平面図
付図2	5区・6区平面図

第 I 章 遺跡の位置と環境

吉井遺跡は、行政区画では、岸和田市吉井町に所在している。岸和田市の北端、天の川下流域の平野上に存在し、標高は、7～9mである（第1図）。西に600mほど行くと、紀州街道で、さらにその西側は、かつて茅渟海（ちぬのうみ）と呼ばれた大阪湾である。

この遺跡は、大阪府教育委員会による府営春木住宅建て替え工事に先立つ試掘調査で、新規発見された遺跡である。

この遺跡周辺には、平成3年3月発行の『大阪府文化財分布図』によると（第2図）、多数の遺跡が発見されている。第2図の1番の遺跡が、河川改修の際発見された、縄文・弥生・古墳から中世に至る多数の遺物が採集された春木天の川遺跡である。2番の遺跡はやはり、縄文・弥生・古墳時代の多数の遺構・遺物が発掘調査によって検出された著名な春木八幡山遺跡である（堅田直『春木八幡山遺跡の研究』昭和40年）。3番の遺跡は、奈良前期の瓦が発見された春木廃寺で、4番が春木廃寺瓦窯跡である。7番・8番の遺跡は

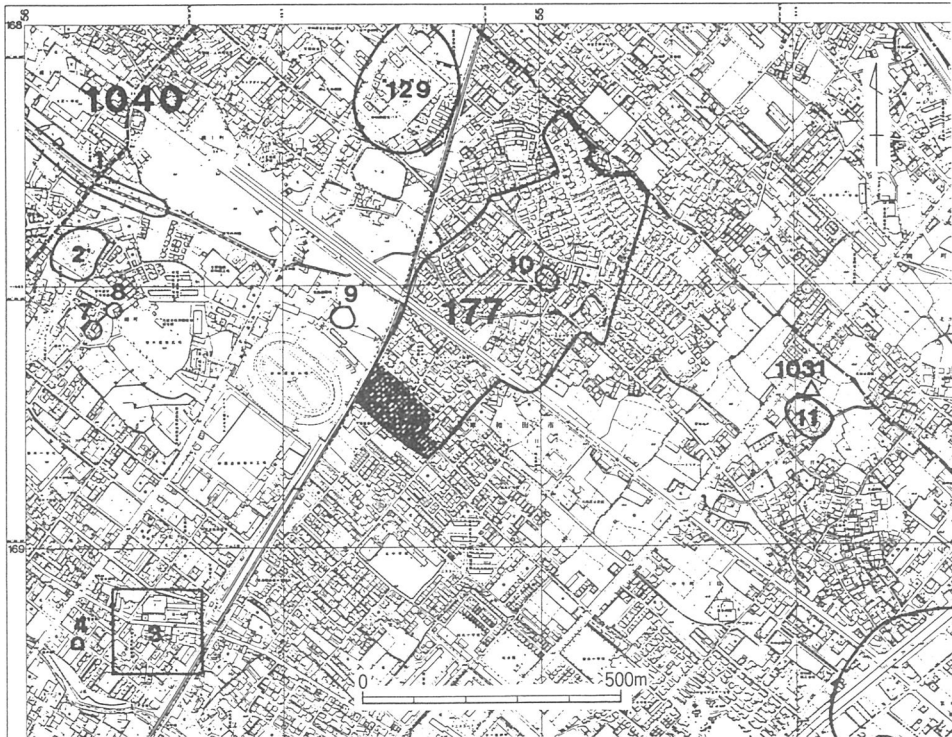


第1図 吉井遺跡位置図（×が調査地）

円墳の権現山古墳、八幡古墳である。9番の遺跡が、古墳～奈良時代の吉井老之坪遺跡である。この遺跡が、今回調査された吉井遺跡に一番近く、古墳後期の須恵器、平安中期の「家」と書かれた墨書須恵器、土師器小皿、須恵器イイダコ壺などが採集されている。イイダコ壺は、春木天の川遺跡や春木八幡山遺跡でも、他の土錘などの漁具と共に多数発見されており、吉井遺跡ともども海岸沿いの遺跡ならではの状況を呈している。

10番・11番が、共に平安後期の吉井上品寺跡、夜疑廃寺跡である。129番の遺跡は、弥生・古墳時代の磯上遺跡である。177番が吉井遺跡で、今回の調査区は、遺跡の南西隅に当たることが分かる。1031番は、岸和田市指定天然記念物である夜疑神社社叢である。1040番は紀州街道である。

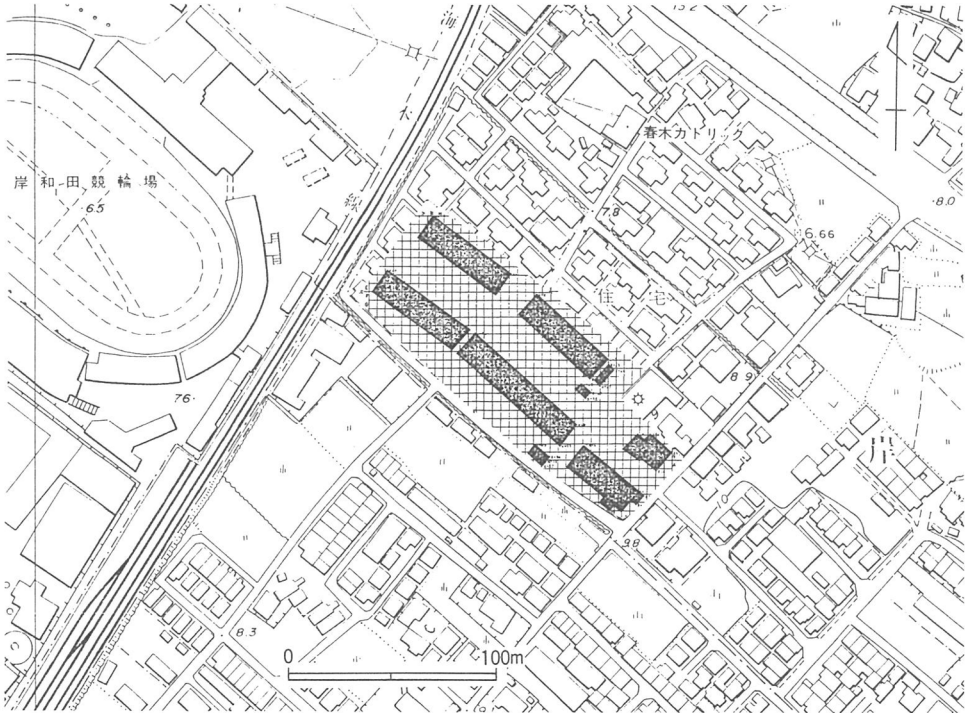
以上のように、吉井遺跡周辺には、縄文時代から中世に至るまでの数多くの遺跡が存在する、歴史的遺産の豊富な地域であったと指摘することができる。また、『吾妻鏡』嘉禎3年(1237)6月1日条には、「矢部禅尼、賜和泉吉井郷御下文」とあって、中世の文献にも、この吉井郷(吉井遺跡)の登場していることが分かる。以降、近世・近代、連綿として吉井郷、吉井町として発展し、現在に至っている。



第2図 吉井遺跡周辺遺跡分布図 (アミ部が調査区)

第II章 調査に至る経過

岸和田市吉井遺跡の発掘調査は、府営春木住宅建て替え第2期工事に先だって行われたものである。なお、府営春木住宅の建て替え工事は関西国際空港建設に関する周辺整備事業の一環として実施された。工事計画に先立って、1989年度に行われた大阪府教育委員会の試掘調査によって、中世の遺物を包含する地点が残っていることが判明した。その結果、大阪府教育委員会の指示にもとづき、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が現地調査を担当することになり、大阪府建築部住宅建設課と協議を重ね、1991年度、本府建築部住宅建設課と現地調査の受託契約を交わし、7月より現地調査を開始した。当初の調査範囲は、東南部の一角に限定されていたが、調査の進捗とともに遺構の広がる範囲がさらに西半部にも広がる可能性が強くなった。先に本府教育委員会が実施した試掘調査は、古い構造物が現地に残されたまま、限られた更地部分で行われていたため、再度広範囲に試掘トレンチを設定して遺跡の範囲確認を行うことになった。その結果、遺物包蔵地が住宅建設予定地の全域に広がることを判明し、発掘調査範囲を全域的に拡大することになった。



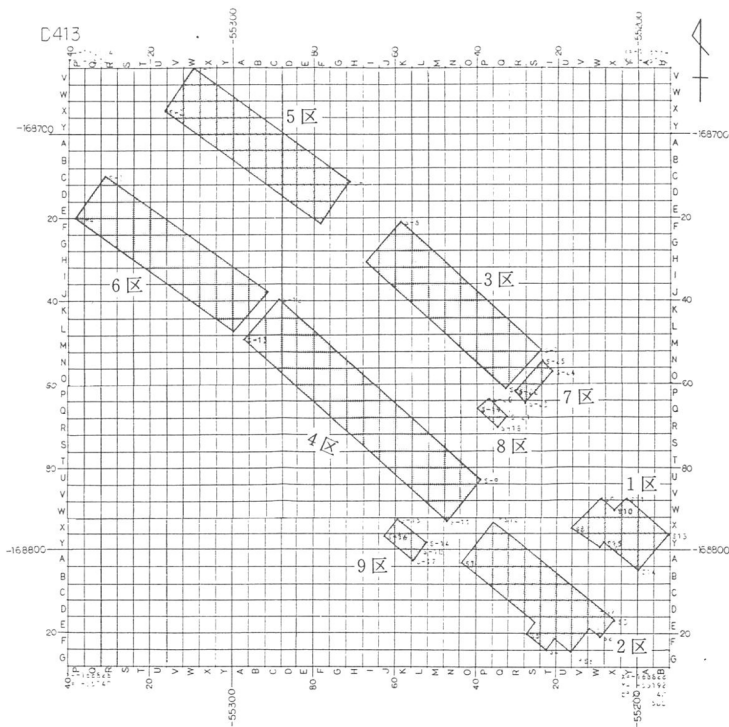
第3図 調査区位置図

第三章 調査結果

第1節 調査経過と調査方法

発掘調査対象区域は、府営住宅建設工事によって、地下の遺構が破壊される部分、すべてであった。住宅建設工事の都合により、調査区南東隅から調査を開始することとした。最初に調査した1区・2区では、中世の掘立柱建物跡が検出されたため、若干、調査区を拡張した。各調査区の面積、検出された主な遺構・遺物は第1表を参照されたい。

調査の方法は、当協会の『発掘調査規程』によって行った。元あった府営住宅を壊し、整地した所だけに、各所に大きな攪乱坑が検出された。新盛土や攪乱坑はすべて機械掘削し、耕土層以下、地山面に至るまでを人力掘削した。検出された遺構は多く、調査面積も大きいことから（第4図）、各遺構は、すべてクレーンを使っての航空測量により図化された。調査終了後は、大きなコンクリート塊などは処分し、掘削土で埋め戻した。



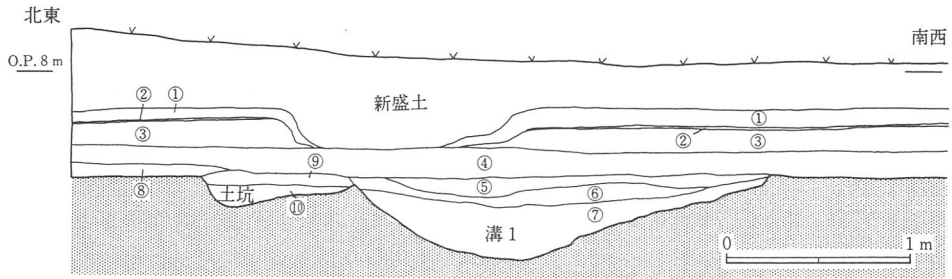
第4図 調査区地区割図

第1表 調査区一覧表

地区	面積(m ²)	遺構	遺物	年代
1区	212	掘立柱建物跡・井戸・土坑・溝	黒色土器・瓦器・土師器・曲物桶・木筒	平安中期～鎌倉
2区	503	溝・掘立柱建物跡・土坑	弥生土器・黒色土器・瓦器・須恵器・瓦	弥生後期・平安～南北朝
3区	576	土坑群・柱穴・溝	弥生土器・須恵器・瓦器・染め付け茶碗	弥生中期・平安～鎌倉・江戸
4区	852	土坑群・柱穴・溝	弥生土器・須恵器・フイゴの羽口・青磁・瓦	古墳後期・奈良・平安・鎌倉
5区	583	土坑群・柱穴	須恵器・灰釉・黒色土器・青白磁・石器	古墳後期・奈良・平安・鎌倉
6区	585	土坑群・柱穴・溝	初期須恵器・灰釉・青磁・軒平瓦	古墳中期・平安・鎌倉
7区	33	柱穴・土坑・井戸	瓦器・土師器・須恵器・瓦・石器	平安・鎌倉
8区	21	柱穴	瓦器・土師器・須恵器・瓦	平安・鎌倉
9区	48	掘立柱建物跡・土坑・溝	黒色土器・瓦器・土師器・須恵器・瓦	平安中期～鎌倉

第2節 基本層序

吉井遺跡では、地表面下30cm～1mまでに、弥生時代以降の土砂の堆積が認められた。1区・2区では、地表面下30cmまでに、新盛土・耕土層・床土層の堆積があった。床土層である黄灰色粘質土層中には、瓦器・土師器などの中世土器が細片となって多数包含されていた。この床土層の下に、1区では中世の、2区では弥生後期と中世の遺構が同一面で検出された。7区、8区、9区、3区・4区の南東部では、新盛土が厚く、地表面下50～80cmまでに、新盛土・耕土層・床土層の堆積があった(第5図)。床土層は、20～30cmの厚さがあり、上層の暗灰色と下層の茶褐色に分かれたが、共に瓦器や土師器などの中世土器が細片となって多数含まれていた。この床土層の直下に、土坑群や溝などが検出されたが、遺構から遺物はほとんど出土しなかった。3区・4区の北西部、5区、6区では、地山面が一段低くなっていた。地表面下60cm～1mまでに、新盛土・耕土層・床土層・包含層の堆積があった。床土層の下から検出された厚さ10～20cmの黄茶色～茶褐色粘土層中からは、弥生時代の石器や古墳後期の須恵器、奈良時代の須恵器などが少量検出され、本来の遺物包含層の残りとして推定された。床土層中には、相変わらず中世土器の細片が多数包含されていた。3区の床土層からは、近世の染め付け茶碗片が出土したため、この各調査区で一律に検出される床土層の時期は近世と推定された。元は南東側が高く、北西側が低いこの遺跡を条里の区画に従って水田に造成したのも、近世遺構と推定された。



- | | |
|---------------------------------|--------------------------------|
| ① 暗灰黒色粘質土層 (耕土層) (5Y5/1) | ⑥ 暗灰褐色粘質土層 (溝 1 埋土) (7.5YR4/1) |
| ② 茶褐色粘質土層 (床土層) (7.5YR5/8) | ⑦ 暗灰褐色細砂層 (溝 1 埋土) (7.5YR5/1) |
| ③ 暗灰色粘質土層 (床土層) (5Y7/1) | ⑧ 暗茶褐色粘土層 (包含層) (10YR4/6) |
| ④ 茶褐色粘質土層 (床土層) (10YR7/8) | ⑨ 灰茶褐色粘質細砂層 (土坑埋土) (10YR6/6) |
| ⑤ 暗灰茶褐色粘質土層 (溝 1 埋土) (7.5YR4/4) | ⑩ 暗灰褐色粘質細砂層 (土坑埋土) (10YR6/1) |

第 5 図 3 区南東隅断面図

第 3 節 遺構と遺物

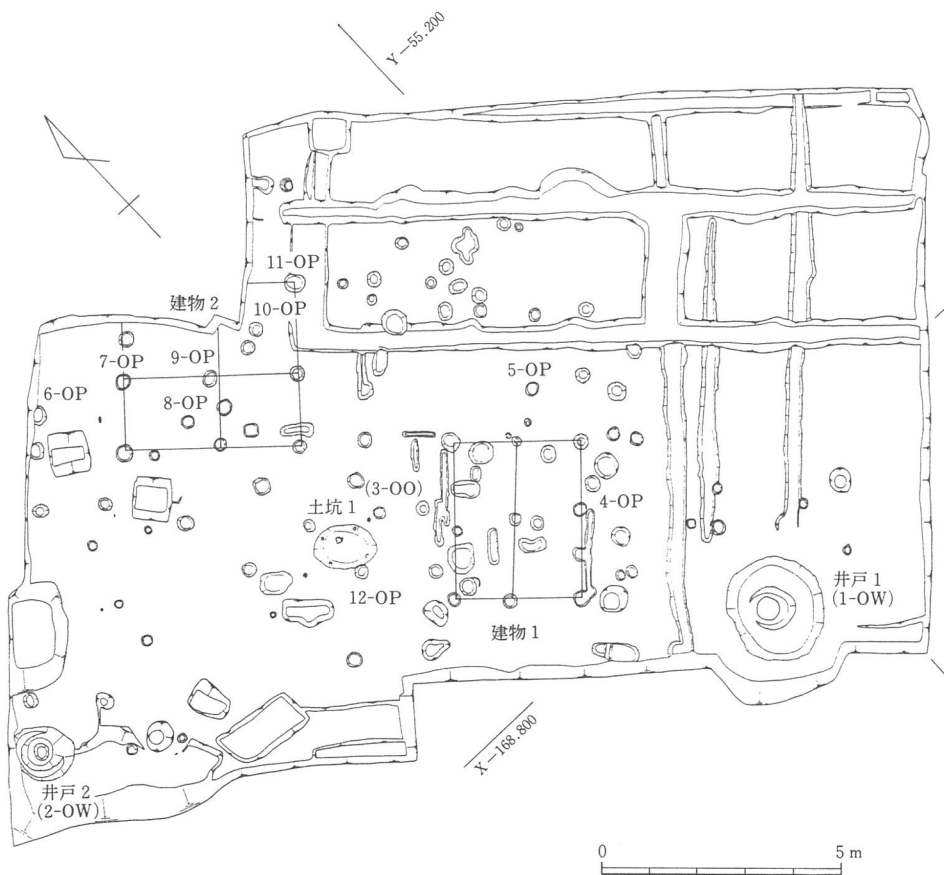
1. 1 区

調査区南東部では、平行する浅い溝が 3 本検出された。遺物は出土しなかった。調査区各所で、土坑が 9 基検出された。内、土坑 1 (3-00) からは、埋土最上層から瓦器碗片が出土した。土坑の壁面および底近くからは、黒色土器碗や土師器鍋が破片でまとまって出土した。平安後期の遺構と判断された。調査区各所で、ピットが 82 個検出された。内、調査区中央では、2 間×3 間の小規模な掘立柱建物跡が復元された (建物 1)。調査区北側では、2 間×2 間の総柱の建物が復元された (建物 2)。建物 2 を構成するピットの 1 つ (9-OP) からは、内黒の黒色土器碗片が出土しているため、平安中期かと推定された。他のピットからは、土師器や黒色土器・瓦器・焼土・須恵器などの細片が 8 つのピットから出土しているのみで、古代～中世のものとは判断できなかった。建物 1 の回りには、小さな雨降り溝のような溝が 6 本検出された。建物 1 も建物 2 も、調査区南東部の 3 本の溝も、すべて、遺跡周辺に残っている条里の方向と一致しており、これらの土坑区画の上限が平安時代にまで溯る可能性が考えられた (第 6 図、第 2 表、第 3 表)。

調査区南部と西部では、井戸が検出された。前者を井戸 1 (1-OW)、後者を井戸 2 (2-OW) とした。井戸 1 は、地表下 30 cm で検出された。平面形は、楕円形。2 段にわたって掘り凹められ、1 段目は肩部から 60 cm まで。2 段目は、径 80～90 cm の楕円形。中央より西に片寄って、円形の木枠が 5 段にわたって積み重ねられていた。木枠は、取り上げ

てみると、側面に木釘穴があったので、曲物桶側板と判明した（第9・10図）。木枠の上から2段目の枠外の部分には、半月形の曲物桶底板を立てて押さえとしていた。枠の合わせ目部分からの泥土侵入を防ぐためかと推定された。この底板には、中央に補修板がついていた（図版25b）。これは、この底板が、もともと曲物桶底板であった時、焼け焦げ穴ができ、修繕用に板を裏面から当てていたものであった。この補修板（木簡？）には、多数の刃物傷と墨書が残っていた（図版26）。また、最下段の木枠に使用されていた曲物桶の底部外面にも墨書が残っていた。共に、何と書いてあるのか、判読できなかった。

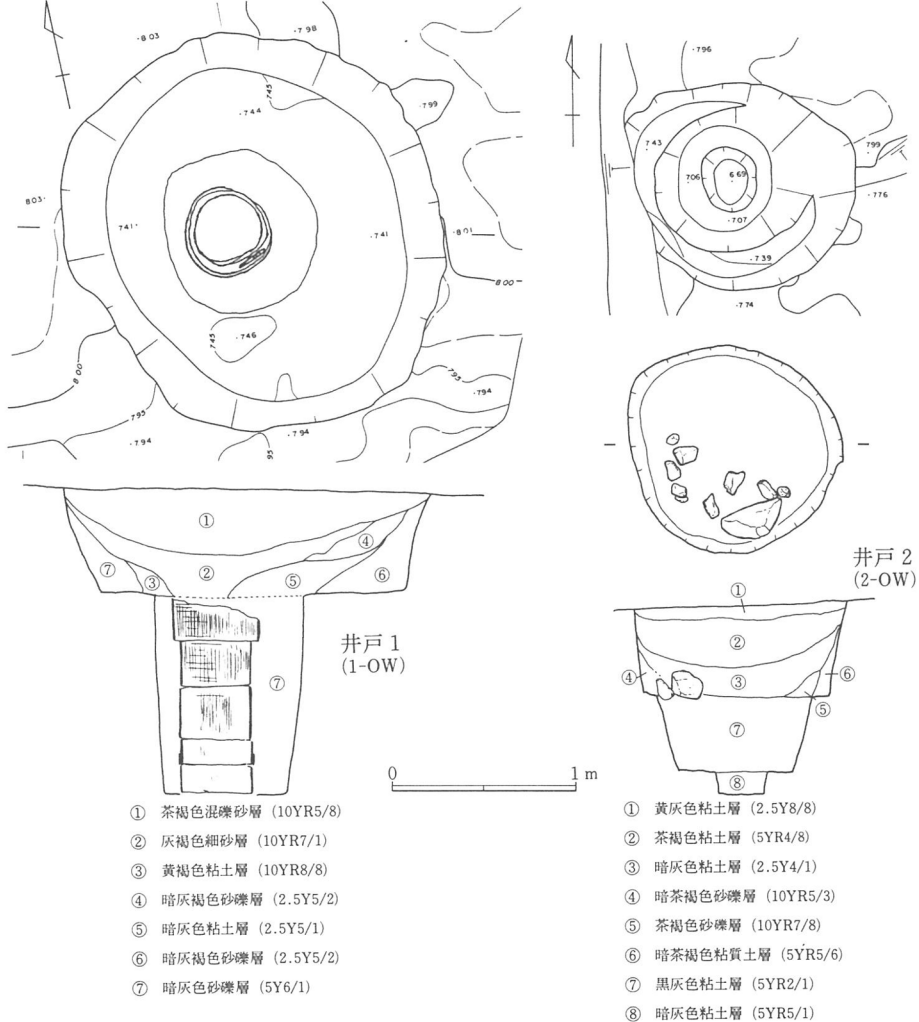
木枠からは、周囲から埋められたような形跡のある断面を呈していた（第7図）。木枠内部は、暗灰色粘土が詰まっていた。粘土は、すべて持帰り、1mmメッシュの篩で水洗した。すると、鼠や蛙などの動物骨はなかったが、野バラや松、葦、桜などの自然遺物が多数の種子類と共に検出された。刻み入りの用途不明の棒が珍しかった（第8図）。



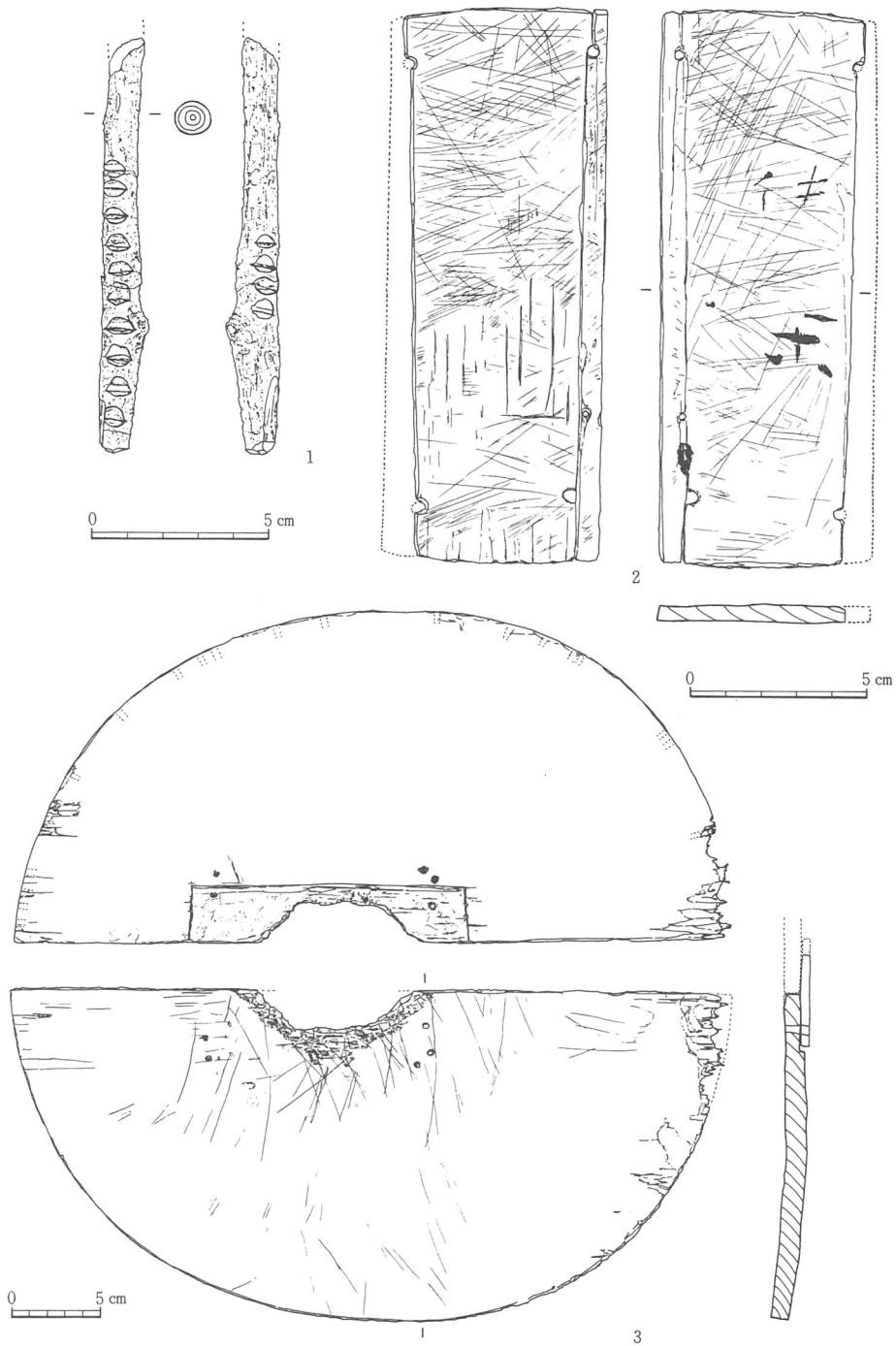
第6図 1区平面図

木枠内部には、土器も多数落込んでいて、底から出土した瓦器椀は、上から出土した瓦器椀より古いことから、使用期間には時期幅のあることが判明した。土師器の皿や東播ねり鉢も出土し、細かな中世土器編年に使用できる一括資料と判断された。土器は、すべて平安末期のものであったので、井戸1の時期と判断された（第11図）。

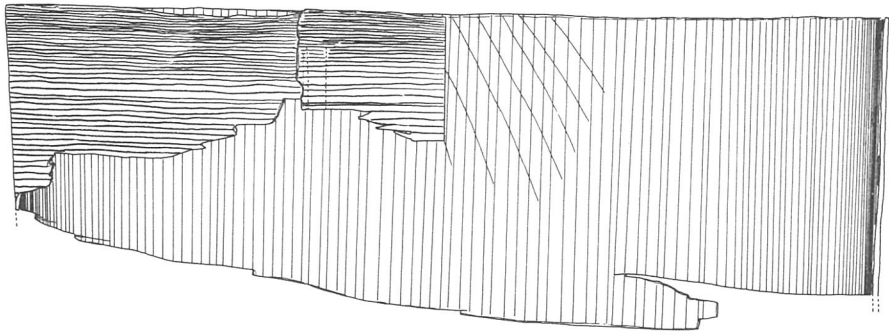
井戸2は、南側が後世の攪乱で大きく削られていた。長さ1.1m、幅1.3m、深さ1.3m。掘り方は、3段にわたって掘られていた。肩から50cmまでの1段目の埋め戻しには、人頭大の石を含めて10数個の石が使用されていた。3段目の掘り方は、径30cm、深さ10cmほどの楕円形掘り方で、木枠などは残存していなかった。1段目の掘り方埋土中からは、内黒の黒色土器椀、土師器鍋などが少量出土し、平安中期の井戸と判断された。



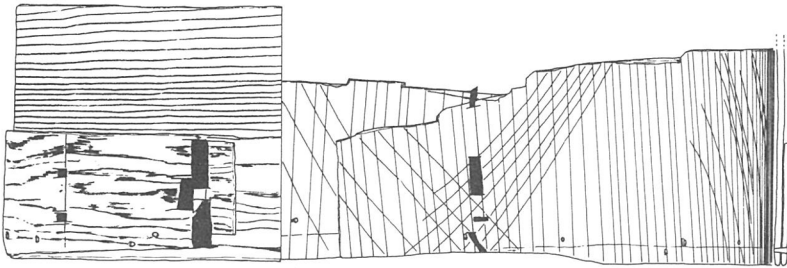
第7図 1区井戸1・井戸2平面図・断面図



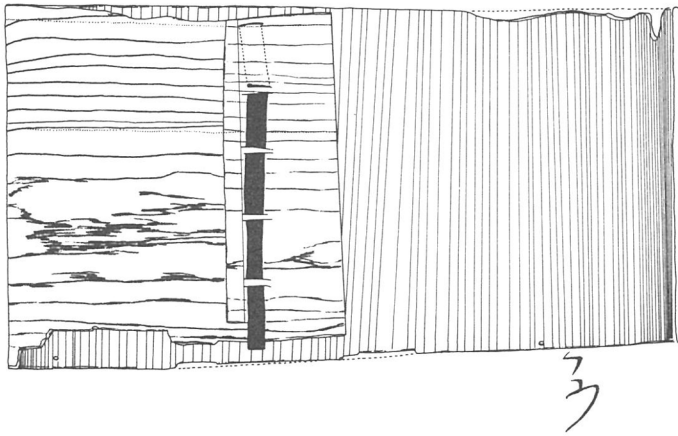
第8图 1区井戸1出土木器实测图(1~3)



1



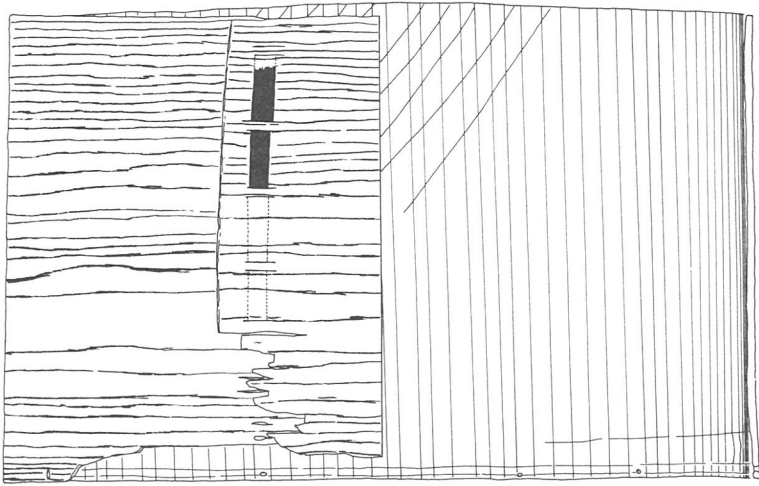
2



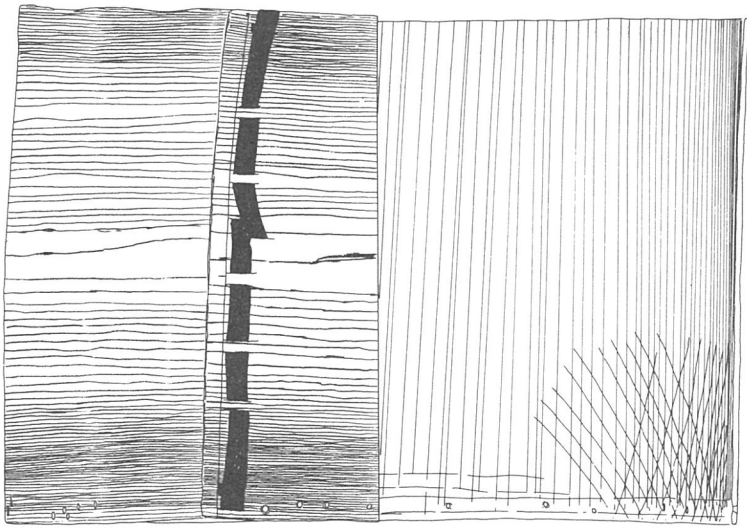
3



第9图 1区井戸1出土曲物桶実測図(1~3)



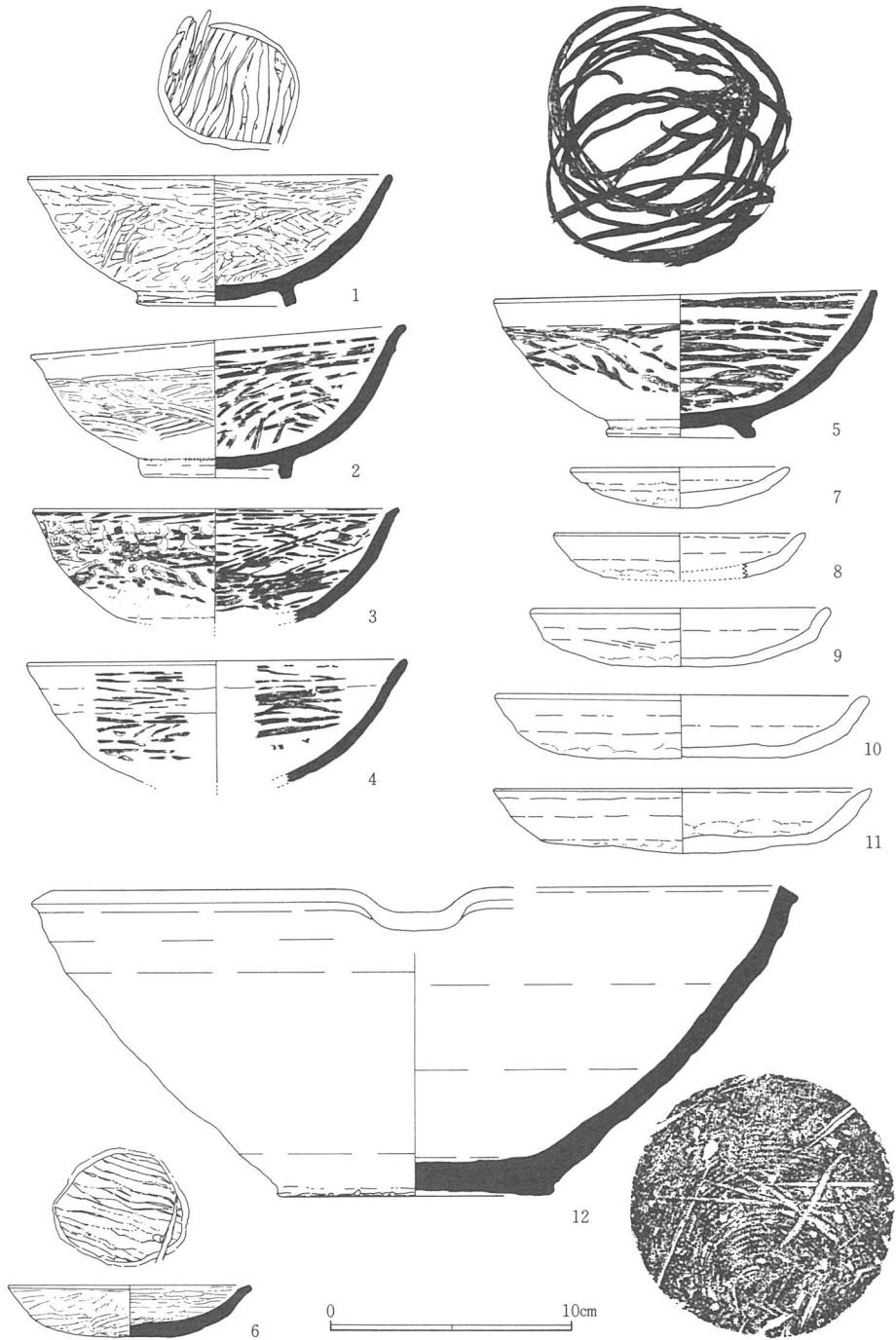
1



2



第10图 1区井戸1出土曲物桶实测图(1·2)



第11图 1区井戸1出土土器实测图(1~12)

2. 2区

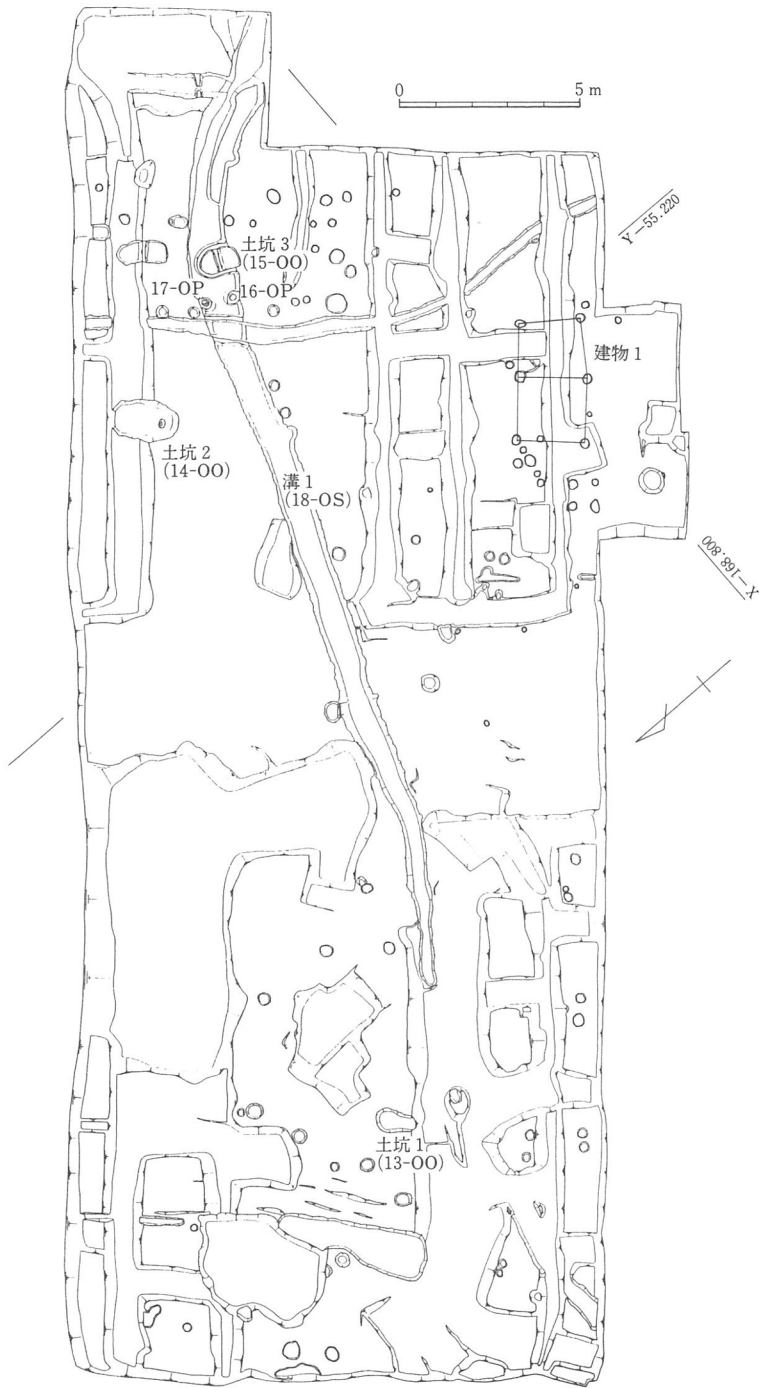
2区は、調査区全域にわたって、後世の攪乱を蒙っていた(第12図)。かろうじて、各所に残っていた床土層中には、瓦器や土師器などの中世土器細片の他に、鎌倉後期の瓦質羽釜や南北朝時代の土師器すり鉢なども混在していた(図版28a)。

調査区を斜めに縦断するように、溝1(18-O S)が床土層直下で、他の中世遺構と同一平面で検出された。最大幅で1.4m、深さは35cm、断面逆台形、38mの長さにはわたって検出された。溝の両端は、調査区外に、まだまだ伸びていることが推定された。溝の埋土である暗灰褐色粘質土中には、弥生後期の土器のみが包含されていた。溝は、緩やかに曲りながら、東から西に水が流れるように掘削されていた。溝1出土の土器には、口縁部を欠いている他は、ほぼ完形の、肩に竹管刺突文のある小壺や、鉢・高杯などの破片の他、茶褐色で、雲母や角閃石を大量に含んだ生駒西麓産の甕や、櫛描き波状文と直線文が交互に施された中期に溯るような壺の腹部小片などが含まれていた(第13図)。

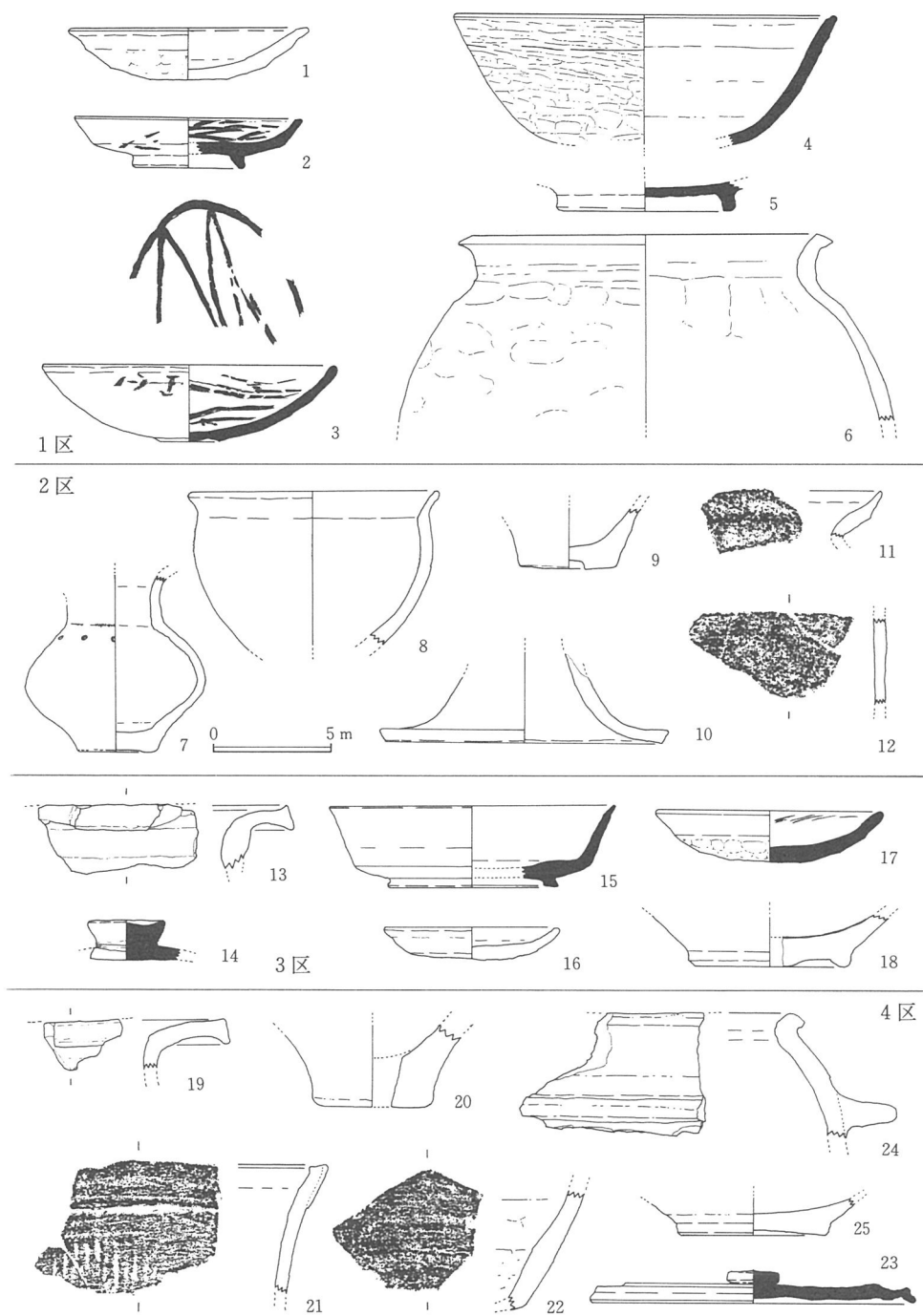
調査区南東部では、溝1を切って、溝が2本検出された。1区南東部で検出された3本の溝の続きかと推定された。遺物は出土せず、時期不明であった。

調査区全域で、ピットが77個検出された。調査区南端では、かろうじて、1間×2間の建物跡が復元された(建物1)。この建物の向きも、1区同様、条里の方向と一致しているので、一連のものかと推定された。ピット1(16-O P)とピット2(17-O P)から弥生土器か土師器か不明な細片が出土しているが、他のピットから遺物は出土せず、調査区が損壊されていることもあり、建物跡としても、うまくまとまらない。

調査区北西部で、小判形の土坑が1基検出された。土坑1(13-O O)からは、瓦器・土師器・瓦の細片が出土したため、平安末期の遺構と判断された。長さ1.1m、幅0.7m、深さ10cm程度の大きさであったので、あるいは土坑墓である可能性も考えられた。調査区東部では、小判形の土坑が固まって、3基検出された。土坑2(14-O O)からは、土師器の細片が出土した。長さ1.9m、幅1.2m、深さ30cm程度の大き目の土坑であった。一端に小ピットが掘られていた。土坑3(15-O O)からは、内黒の黒色土器碗の大破片が出土しているので、平安中期の土坑と判断された。もう1基の土坑も、土坑2の北側に1m程離れて検出され、土坑の形、大きさ、長軸の向きも揃っていたので、これら3基の土坑は、ほぼ同時期のものかと推定された。土坑3の黒色土器碗が、供献土器ということになり、土坑群が墓である可能性が高いということになれば、1区で検出された建物群や井戸と同時代に、屋敷地に隣接して墓のある例として考えられることになる。



第12图 2区平面图



第13图 2区・3区・4区出土土器实测图(1~25)

3. 3区

3区は、調査区南部を水道管・ガス管で、破壊されていた。北西部にも攪乱坑が幾つもあり、南北に、あるいは東西に新しい溝も検出された。それ以外の部分には、耕土層の下に床土層が残存しており、旧石器時代の翼状剥片や縄文時代のサヌカイト製石鏃の他に、弥生中期の壺片、古墳中期の須恵器杯蓋片、器台片、平安前期の須恵器杯片、平安～鎌倉時代の土師器小皿、瓦器皿、瓦器片口鍋、東播ねり鉢、格子目叩きのある土師器片、青磁、白磁片の他、近世の染め付け茶碗（図版29）など、多種類の遺物が含まれていた。床土層に含まれている土器は、いずれも細片で、風化も進んでいることから、近世に、中世の遺跡が損壊されて、水田に造成された結果と判断された。

調査区南東部では、大きな溝1（45-O S）が検出された。この溝は、断面図（第5図）でも明らかなように、幅2.3m、深さ45cm、断面偏平なU字形である。この溝は、長さ29mにわたって検出された。ほとんど直角に4回程曲がっていた。溝の幅も狭い所では幅1m、深さ20cmとなり、溝幅、深さも一定していない。埋土は、暗灰褐色の細砂層で、遺物は、石、自然遺物の類に至るまで、一切含まれていなかった。埋土最下層には、部分的に灰色の砂が焼き藁のような炭化物と共に含まれている所があり、水が南東から北西に流れていたことは明らかであった。ただし、このような深い大きな溝が人工のものなのか、自然の営為になるものか、判断に迷わされた。付近の調査区に、このような自然流路はなく、流路が形成されるような地形でもないことから、やはり、人工溝である可能性の方が高いと考えられた。溝の時期は、後述の土坑群を切っていることから、古墳後期以降近世以前としか推定できない。

調査区北西部では、小さな溝2（46-O S）が検出された。暗い焦げ茶色粘質土が落込んでいたが、遺物が出土せず、時期不明である。西ほど、溝幅が広がっていた。

調査区南東部を中心に、径30cm、深さ15cm程度のピットが36個検出された。遺物は出土せず、柱の痕跡も認められず、建物跡としても、うまくまとまらない（付図1）。

調査区南東部と北西部を中心に、各所で、土坑が固まって、計44基検出された。南東部で検出された土坑群は、2～4基ごとに接続し、あるいは近接して検出された。土坑の向きは様々、大きさも長さ70～210cmと違いが認められた。内部には、茶褐色や黄褐色の粘質土が詰まっていて、遺物は出土しなかった。人骨なども検出されなかったが、小判形をした形状から、墓ではないかと推定された（図版9）。

調査区北西部では、22基の土坑が固まって検出された（図版10）。この土坑群は、小判

形、円形のものが含まれているが、深さは5～10cmと非常に浅かった。恐らく、土坑上部が、後世、大きく削平された結果かと推定された。遺物が出土せず、時期不明であるが、最近、府下各地で検出され始めた古墳後期の群集土坑墓である可能性が考えられた。

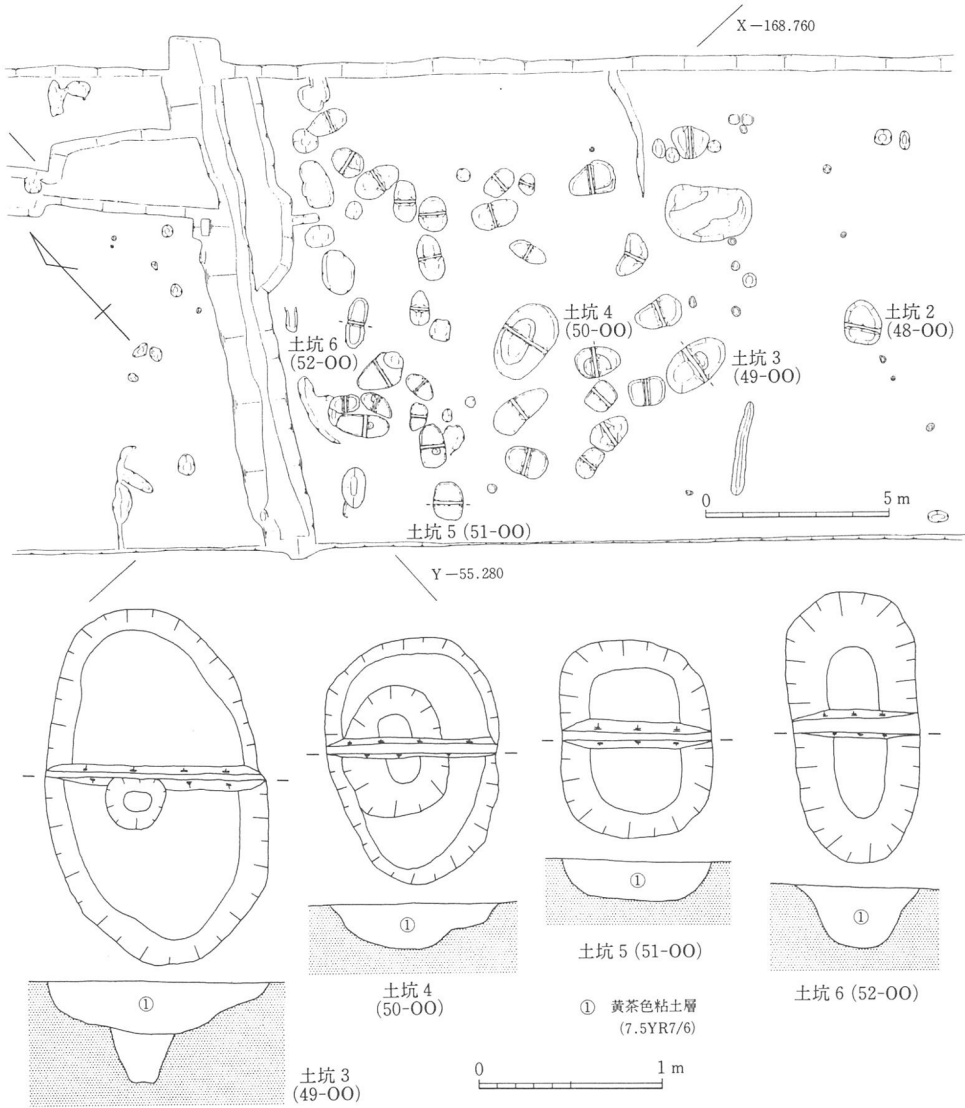
4. 4区

4区でも、後世の攪乱を随所で蒙っていたが、残存部分には床土層があり、同層中からは、多数の中世土器細片が出土した。その中には、縄文～弥生時代のサヌカイト製石鏃3点、剥片5点、安山岩製磨石1点、灰緑色粘板岩製砥石1点も含まれていた。サヌカイト剥片の中には、四国・金山産サヌカイトの1点混じていたのが珍しかった。弥生中期の壺、甕片、口縁端部外面に帯をもち、長方形叩きをもった、古墳中期のものかと推定される土師器甕、緑釉もしくは灰釉陶器皿を真似た奈良～平安時代の土師器皿、瓦質の把手、フイゴの羽口、白磁、青磁碗、東播ねり鉢、瓦質甕、口縁端部を小さく折り曲げた土師器羽釜、常滑焼の大甕片なども含まれていた（図版30）。平瓦の破片も多数出土し（図版31 a）、瓦葺きの屋敷、あるいは寺も近くに存在していたことが推定された。

調査区の中でも一段高い調査区南東部を中心に、ピットが42個検出された。整然と並ぶピットはなく、遺物も出土しなかった（付図1）。

調査区南東部と中央部の境には段があり、20cmほど下がっていた。段下には、条里の方向と一致する小溝や杭列が存在した。この一段下がった調査区中央部には、厚さ10～20cmの遺物包含層が残存していた。暗茶褐色粘土層中には、東寄り部分に奈良時代の、西寄り部分に古墳後期の土器が包含されていた（図版31 b）。

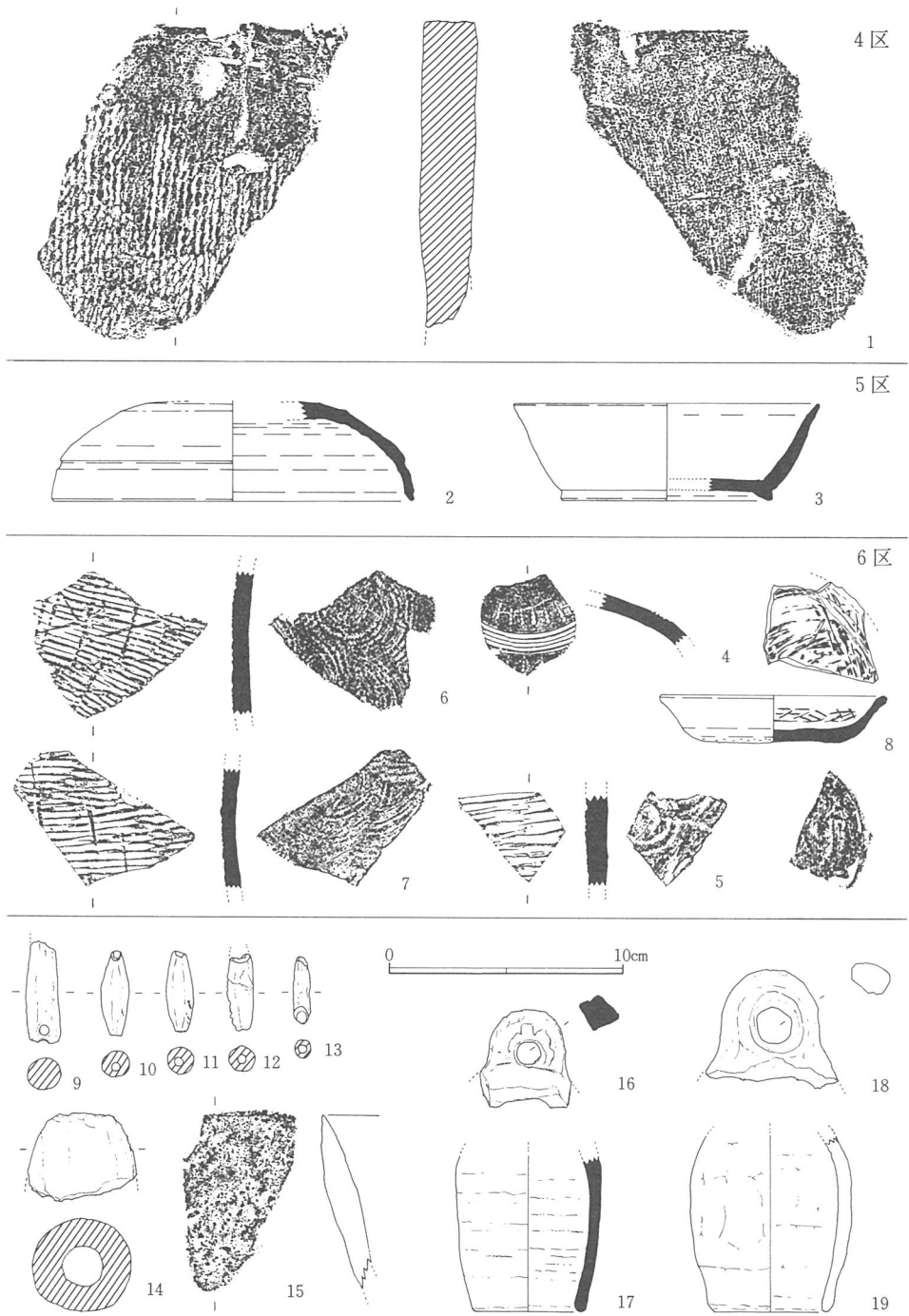
調査区各所で、土坑が52基検出された。内、調査区中央部では、42基の土坑が密集して検出された。土坑の中で、代表的な4基の平面図・断面図を第14図に示したが、形・大きさ・深さ・向きなど、一定しない。どの土坑にも、黄茶色の粘土層が詰まっていた、遺物は一切出土しなかった。土坑間に切り合い関係はなく、土坑掘削時には、お互いの土坑の位置・存在は認識されていた様子である。調査区の中で、この土坑群の両端に、遺構の一切検出されない空間があるので、この土坑群は、ある限定された範囲内に集中して掘削されたものであることが分かる。土坑群の時期は不明であるが、土坑群の上を覆っていた汚れた暗茶褐色の包含層中から、古墳後期の須恵器片が出土したことで、古墳後期のものである可能性が考えられた。3区で検出された土坑群と同様のものが、3区の南西の調査区である4区でも検出されたと考えられた。両調査区の間にも土坑群の存在が推定されるとなると、遺跡全体としては、かなりな数の土坑群ということになる。



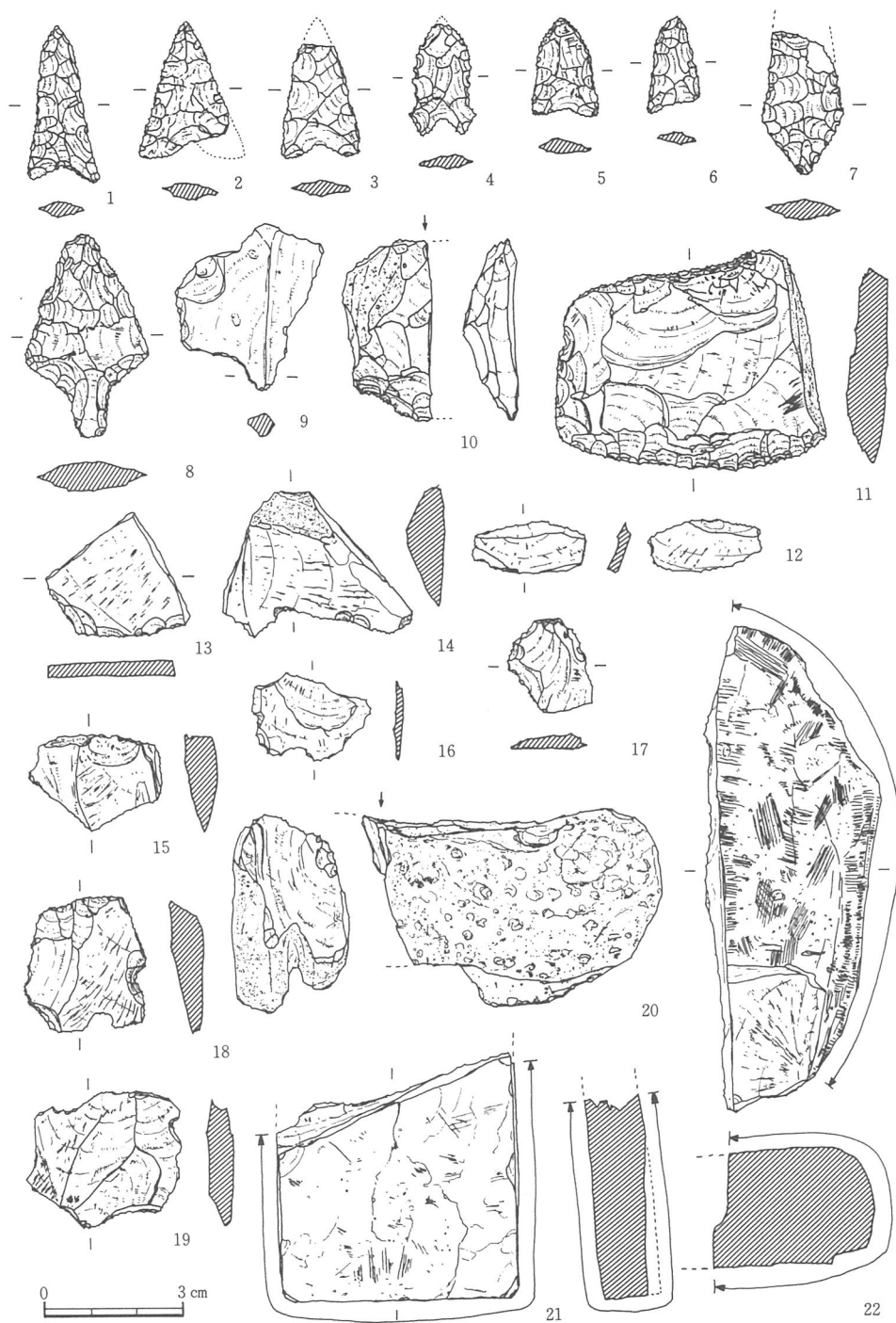
第14図 4区土坑群平面図・断面図

5. 5区

5区は、調査区中央を斜めに、水道管・ガス管が走り、大きく攪乱されていた。出土した遺物も、コンテナ（58×37×14cm）にして、5箱と少なかった。ちなみに、1区では8箱、2区では3箱、3区で6箱、4区で12箱、6区で12箱出土した。今回の調査区では、遺構・遺物の数は、北東ほど少ないという傾向が認められた。もちろん、出土遺物のほとんどが、床土層出土の中世土器であるという点は、各調査区とも同じである（第15図）。



第15图 4区・5区・6区出土土器实测图(1~19)



第16图 2区~7区出土石器实测图(1~22)

5区床土層からは、サヌカイトの礫（一端が割られている）、石錐、剥片も出土した。調査区北西部の包含層からは、サヌカイト製、弥生中期の不定形刃器（第16図）も単独、完形で出土した。他に、床土層からは、奈良時代の須恵器杯（図版32c）、製塩土器（図版35b）、棒状土錘、土師器イイダコ壺、平安時代の内黒の黒色土器碗、灰釉皿、白磁、青磁、青白磁、土師器、須恵器、瓦器、瓦などが出土している。漁具は、紡錘状土錘が4区・6区の床土層から出土し、イイダコ壺も土師器のものが4区から、須恵器のものが6区床土層などから出土したりしている。確かに、漁具の出土は、海岸に近い遺跡ならではの特徴である。

調査区各所で、4個の小さなピットが検出された。遺物も出土せず、時期不明である。

調査区北西部を中心に、土坑が23基検出された。調査区北西部は、東から、2基、3基、4基、5基と、2～3mおきに弧状に固まって検出された。内部には、斑のある灰黄褐色粘土が詰まっていた。土坑中から遺物は出土しなかったが、土坑群の上を覆っていた黄茶色粘土層からは、古墳後期の須恵器杯蓋大破片（図版32d）が出土し、土坑群の時期と推定された。その杯蓋は、後期でも初頭のものであった。他に、遺構はなく、当時も、あまり生産や居住に利用されるような土地ではなかった様子である（付図2）。

6. 6区

床土層から、瓦器碗・瓦質羽釜・青磁碗などの中世土器細片が多数出土した。中に、底に糸切り痕のある瓦器小皿、珠文が続く軒平瓦、緑釉の高杯などの珍しい遺物が混在していた。また、櫛描き刺突文と直線文をもった初期須恵器の蓋（図版33a）、内面の青海波を磨り消した須恵器甕など古墳中期の遺物が多かったのも、この地区の特徴であった。また、サヌカイト製の縄文時代の石鏃1点、弥生中期の石鏃2点、剥片1点も出土した。

調査区各所から、ピットが6個検出された。遺物も出土せず、時期不明である。

調査区中央部では、細く、浅い溝1（97-O S）が条里の方向に沿って、直線的に検出された（付図2）。内部に、暗い茶褐色粘質土が落込んでいたが遺物も出土せず、時期不明である。調査区北西部では、溝2（98-O S）が緩やかに曲がって検出された。遺物は出土しなかったが、古墳後期と推定される土坑が溝2を切っていたので、時期は、それ以前と推定された。調査区西端で溝3（99-O S）が検出された。遺物は出土しなかった。

調査区各所で、土坑が37基検出された。単独、2基、あるいは数基が固まって分布し、西隅の土坑群のみが21基固まっていた。内部には、暗い茶褐色、あるいは黄褐色の粘質土が詰まっているのみで、遺物は出土しなかった。形状から、土坑墓と推定された。

7. 7区

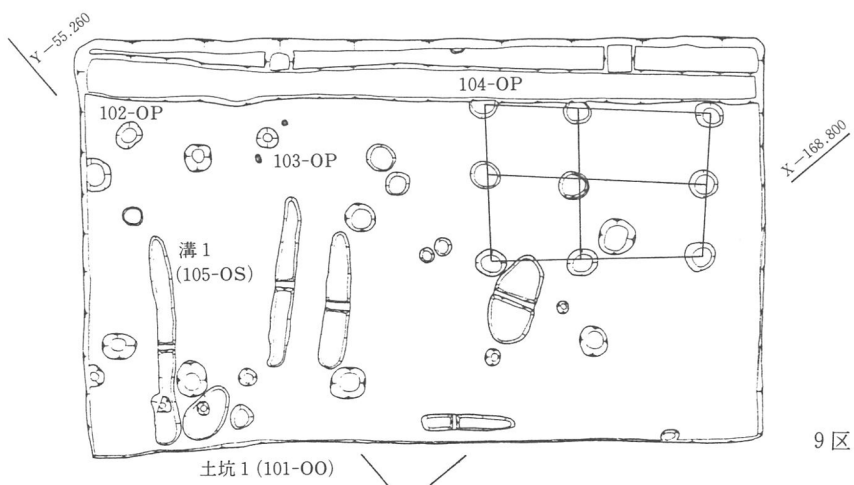
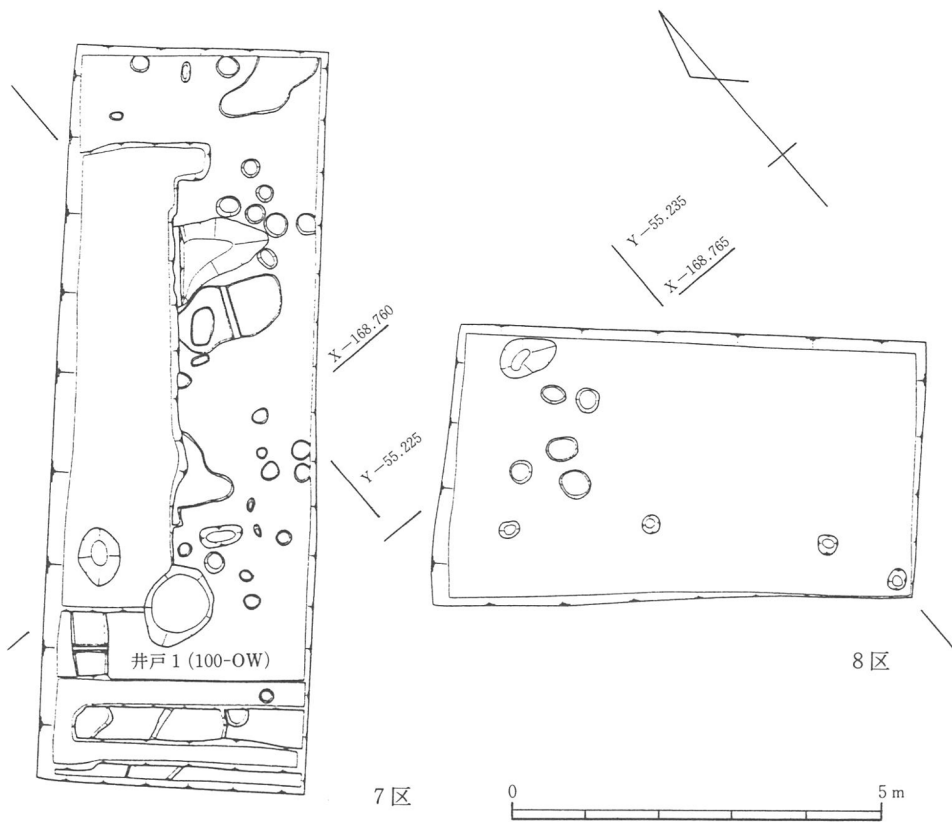
調査区西部・南部は、攪乱を受け、遺構面が損壊されていた。狭い調査区であったが、遺構は多数検出された（第17図）。床土層からは、土師器羽釜、三足、瓦質甕などの中世土器細片が出土し、遺構面に僅か残存していた包含層中からは、縄文時代のサヌカイト製石鏃が1点出土した。調査区各所で、小さな、浅いピットが23個検出された。遺物は出土しなかった。土坑も8基検出された。浅いものもあり、船底を呈するものもあり、3区で検出された土坑群の続きと推定された。井戸も1基（100-OW）検出された。径1.1m、深さ70cm、平底で、内部には黄褐色粘土が斑となって、詰まっていた。遺物が出土せず、杵もなかったことから、素掘りの井戸と推定された。時期は不明である。調査区北隅で、幅2.5mにわたって、深さ24cmの溝が検出された。片方の肩のみの検出であったが、3区の溝1（45-OS）の続きと判断された。遺物は、やはり出土しなかった。

8. 8区

地表下50cmで、遺構面が検出された。新盛土・耕土層の下に、厚さ20cmほどの床土層があり、瓦器や土師器・青磁・白磁などの中世土器細片が含まれていた（図版34c）。遺構面は平坦で、調査区西部のみに、小さな土坑1基、浅いピット6個が検出された（図版21a）。遺物が出土せず、共に時期不明である（第17図）。

9. 9区

地表下25cmで、遺構面が検出された。新盛土・耕土層の下に、厚さ10cmほどの床土層があり、瓦器・土師器などの中世土器細片が含まれていた。この調査区のみ、地山面が暗灰茶褐色の砂礫層で、段丘礫層上面が現れていた。この調査区も、狭いけれど遺構が多数検出された。調査区全域でピットが18個検出された。東側で、径35cmほどの円形ピットが9個並び、2間×2間の総柱の建物跡と復元された。この小さな建物の向きは条里の方向と一致していたので、中世以降のものかと推定された。ピット2（103-OP）からは、内黒の黒色土器碗の細片が1点出土した。混入の可能性もあるが、あるいは、その時期のものである可能性もあった。ピット3（104-OP）からは、磨滅した須恵器片も1点出土した。古墳後期かと推定されたが、これも混入である可能性もあった。調査区西隅の土坑1（101-OO）からは、瓦器碗・土師器細片が出土し、平安末期のものかと推定された。他に、溝が4本検出された。いずれも幅30cm、深さ5cmほどの細く、浅いものであった。条里の方向とほぼ一致、あるいは直角であり、断続的に続くこともあり、スキ溝である可能性もあった。土師器細片が出土しているので、中世のものかと推定された（第17図）。



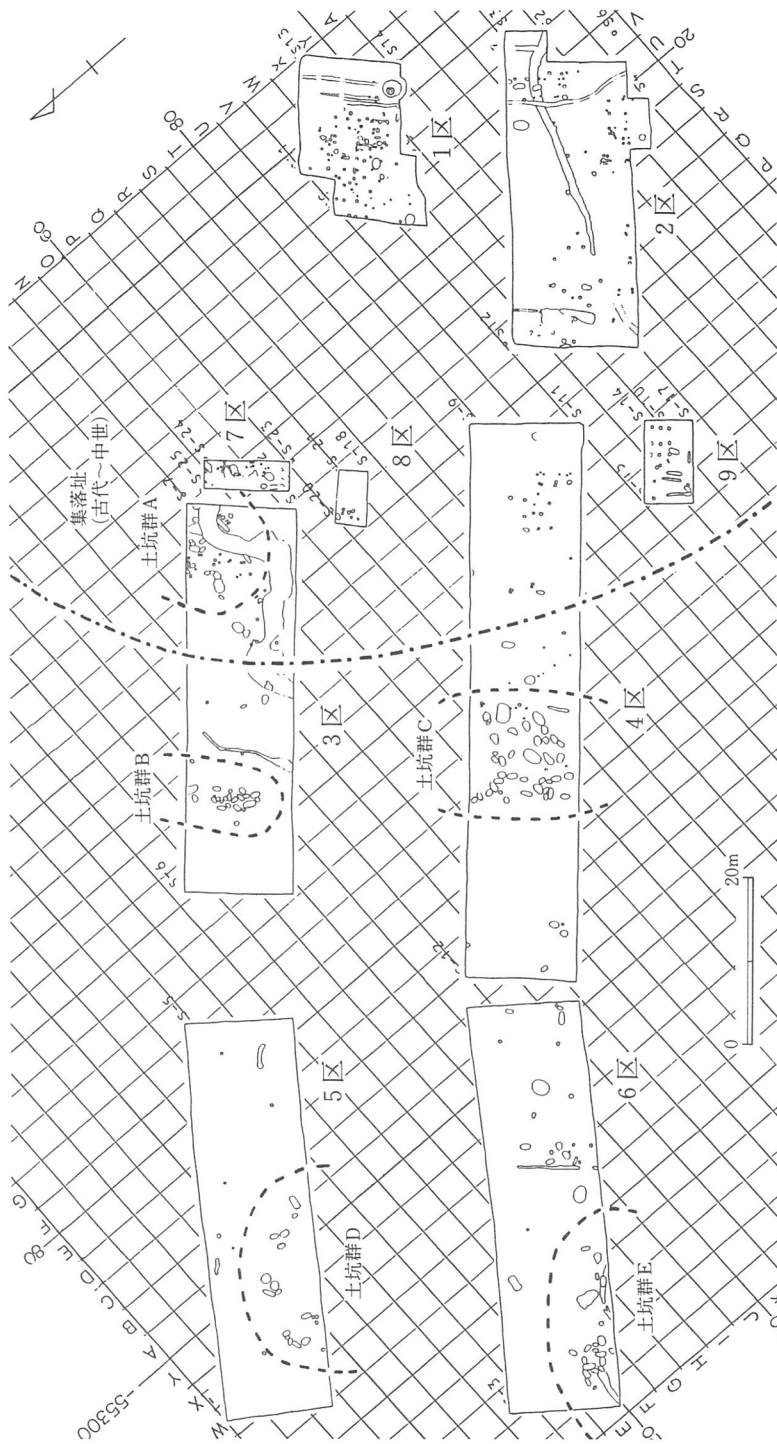
第17图 7区・8区・9区平面图

第Ⅳ章 まとめ

吉井遺跡は、古代～中世にかけての集落遺跡である。和泉国南郡八木郷のうちの一村と推定された。掘立柱建物跡や井戸など、村の一部の姿が今回の調査で初めて明らかになった。遺跡内の床土層中には、多量の中世土器が含まれていることにより、かなり大規模な村であったことも判明した。瓦も多数出土したことにより、寺の存在も推定された。以下、遺構・遺物に分けて、調査結果をまとめる。

(遺構) ① 1区、2区、3区・4区南東部、7区、8区、9区で、掘立柱建物跡、井戸、溝、土坑が検出されたことにより、この範囲は、古代～中世の集落址と判明した(第18図)。② 検出された建物跡は、条里の方向に一致するものばかりであることから、土地区画が完成してからの集落と推定された。③ 4区・5区の包含層から出土した須恵器により、3区～6区で検出された土坑群の年代は、古墳後期と推定された。④ 土坑群の土坑の数は、総数で約160基あり、ほとんどは墓と推定された(第18図土坑群A～E)。⑤ 2区で溝が検出されたことにより、近くに弥生後期の村の存在が推定された。

(遺物) ① 旧石器時代の翼状剥片が出土したことにより、近くに、石器製作した場所の存在が推定された。② 縄文時代の石鏃が出土したことにより、このような段丘上で頻繁に狩りをしてきた様子が復元された。③ 弥生中期の石鏃や不定形刃器が出土したり、中期初頭～中頃の土器が床土層中に含まれていたり、近くに、弥生中期の村の存在が推定された。④ 2区溝1出土の弥生後期土器中に、生駒西麓産の甕が含まれていることにより、中河内地方との交易関係の存在が判明した。⑤ 6区で、初期須恵器や中期後半の須恵器が出土したことにより、古墳中期の遺構も存在することが推定された。⑥ 4区・5区で奈良時代の須恵器や製塩土器が出土したことにより、奈良時代の遺構の存在も推定された。⑦ 平安～鎌倉時代の黒色土器、土師器、緑釉、灰釉、瓦器、須恵器、青磁、白磁などが多数出土した。瓦器や土師器羽釜は、従来から指摘されている和泉型の特徴を整えたものがほとんどであった。⑧ 1区井戸1出土の土器類は、和泉の中世土器を細分する際の良好な一括資料となった。⑨ 1区井戸1使用の木杵は、中世の木器としての曲物桶、底板、補修板などの実際の使用状況を知り得る貴重な例であった。⑩ 1区井戸1出土の自然遺物は、中世の井戸周辺を復元する際の手懸りを与えてくれた。⑪ イイダコ壺、土錘など、漁具も古代～中世の吉井遺跡に存在していたことが判明した。



第18図 吉井遺跡遺構概念図

第2表 遺構一覧表

遺構番号	遺構名	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	出土遺物	時期
1-OW	1区井戸1	217	202	166	曲物桶・瓦器・土師器・須恵器・自然遺物	平安末期
2-OW	〃 2	112	125	130	黒色土器・土師器	平安中期
3-OO	1区土坑1	91	132	39	黒色土器・土師器・須恵器	平安後期
4-OP	1区ピット1	34	31	15	土師器	中世
5-OP	〃 2	29	27	25	〃	〃
6-OP	〃 3	41	26	11	なし	不明
7-OP	〃 4	33	30	20	土師器	中世
8-OP	〃 5	27	27	16	〃	〃
9-OP	〃 6	35	30	17	黒色土器	平安中期
10-OP	〃 7	30	29	15	黒色土器・瓦器・土師器	平安末期
11-OP	〃 8	35	43	35	焼土・須恵器	中世
12-OP	〃 9	28	28	12	土師器	〃
13-OO	2区土坑1	111	68	8	瓦器・土師器・瓦	平安末期
14-OO	〃 2	185	118	27	土師器	中世
15-OO	〃 3	112	68	32	黒色土器・土師器	平安中期
16-OP	2区ピット1	18	19	5	土師器?	中世
17-OP	〃 2	20	19	5	弥生土器?	〃
18-OS	2区溝1	3,770	135	35	弥生土器・石器	弥生後期
19-OO	3区土坑1	220	53	44	なし	不明
20-OO	〃 2	72	55	15	〃	〃
21-OO	〃 3	77	45	11	〃	〃
22-OO	〃 4	80	45	6	〃	〃
23-OO	〃 5	121	73	26	〃	〃
24-OO	〃 6	85	53	13	〃	〃

遺構番号	遺構名	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	出土遺物	時期
25-00	3区土坑7	141	49	20	なし	不明
26-00	" 8	64	50	12	"	"
27-00	" 9	102	83	16	"	"
28-00	" 10	169	116	27	"	"
29-00	" 11	142	109	30	"	"
30-00	" 12	92	82	38	"	"
31-00	" 13	117	76	7	"	"
32-00	" 14	94	46	11	"	"
33-00	" 15	87	60	21	"	"
34-00	" 16	91	56	5	"	"
35-00	" 17	75	49	5	"	"
36-00	" 18	107	55	5	"	"
37-00	" 19	92	40	5	"	"
38-00	" 20	69	43	6	"	"
39-00	" 21	89	53	5	"	"
40-00	" 22	107	51	5	"	"
41-00	" 23	79	46	9	"	"
42-00	" 24	89	67	6	"	"
43-00	" 25	116	66	17	"	"
44-00	" 26	150	82	16	"	"
45-OS	3区溝1	2,900	313	62	"	"
46-OS	" 2	1,135	120	19	"	"
47-00	4区土坑1	150	76	23	"	古墳後期?
48-00	" 2	120	100	44	"	"
49-00	" 3	188	109	45	"	"

遺構番号	遺構名	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	出土遺物	時期
50-00	4区土坑4	124	85	18	なし	不明
51-00	〃 5	102	82	8	〃	〃
52-00	〃 6	139	53	27	〃	〃
53-00	5区土坑1	112	84	16	〃	〃
54-00	〃 2	121	45	16	〃	〃
55-00	〃 3	85	53	15	〃	〃
56-00	〃 4	93	59	17	〃	〃
57-00	〃 5	125	63	18	〃	〃
58-00	〃 6	92	44	25	〃	〃
59-00	〃 7	160	55	23	〃	〃
60-00	〃 8	113	95	23	〃	古墳後期?
61-00	〃 9	125	111	29	〃	〃
62-00	〃 10	98	60	21	〃	〃
63-00	〃 11	98	61	9	〃	〃
64-00	〃 12	117	77	9	〃	〃
65-00	〃 13	70	50	9	〃	〃
66-00	〃 14	172	74	14	〃	〃
67-00	〃 15	296	64	29	〃	〃
68-00	〃 16	205	40	15	〃	〃
69-00	6区土坑1	66	38	10	〃	不明
70-00	〃 2	151	68	20	〃	〃
71-00	〃 3	89	46	7	〃	〃
72-00	〃 4	194	174	23	〃	〃
73-00	〃 5	64	41	8	〃	〃
74-00	〃 6	119	66	14	〃	〃

遺構番号	遺構名	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	出土遺物	時期
75-00	6区土坑7	100	57	15	なし	不明
76-00	〃 8	93	69	16	〃	〃
77-00	〃 9	106	69	13	〃	〃
78-00	〃 10	110	30	13	〃	〃
79-00	〃 11	193	140	32	〃	〃
80-00	〃 12	101	42	19	〃	〃
81-00	〃 13	130	87	15	〃	〃
82-00	〃 14	87	38	8	〃	〃
83-00	〃 15	259	138	32	〃	〃
84-00	〃 16	187	85	30	〃	〃
85-00	〃 17	124	83	24	〃	〃
86-00	〃 18	102	53	25	〃	〃
87-00	〃 19	90	51	13	〃	〃
88-00	〃 20	149	72	17	〃	〃
89-00	〃 21	125	65	22	〃	〃
90-00	〃 22	106	68	29	〃	〃
91-00	〃 23	67	36	8	〃	〃
92-00	〃 24	93	51	10	〃	〃
93-00	〃 25	110	68	19	〃	〃
94-00	〃 26	96	45	12	〃	〃
95-00	〃 27	90	46	9	〃	〃
96-00	〃 28	79	51	15	〃	〃
97-OS	6区溝1	702	40	9	〃	〃
98-OS	〃 2	640	56	7	〃	〃
99-OS	〃 3	410	103	33	〃	〃

遺構番号	遺構名	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	出土遺物	時期
100-OW	7区井戸1	111	93	73	なし	不明
101-OO	9区土坑1	82	51	7	瓦器椀・土師器	平安末期?
102-OP	9区ピット1	36	36	28	なし	不明
103-OP	” 2	27	29	22	黒色土器	平安中期
104-OP	” 3	40	25	5	須恵器	古墳後期?
105-OS	9区溝1	282	33	3	土師器	中世

第3表 出土遺物観察表

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	特徴	時期	出土遺構
第8図1	図版27a-10	刻み入り棒	長さ 11.6 幅 1.5	片面に10個、片面に4個の刻み。	平安末期	1区井戸1
” 2	図版26a	補修板	長さ 15.5 幅 5.7 厚さ 0.5	表裏面に刃物傷。4孔。墨書痕跡。ヒノキ。	”	”
” 3	図版25b	底板	長さ 40.2 幅 18.5 厚さ 1.2	中央に焼け焦げ。側面に24個の木釘。ヒノキ。内面に黒漆。	”	”
第9図1	図版25a-1	曲物桶	直径 48.3 高さ 16.8 厚さ 0.3	上から1段目の枠。倒立で使用。ヒノキ。	”	”
” 2	” -4	”	直径 42.6 高さ 13.7 厚さ 0.4	上から4段目の枠。正立で使用。帯あり。ヒノキ。	”	”
” 3	” -5	”	直径 36.7 高さ 19.7 厚さ 0.4	上から5段目の枠。倒立で使用。外面に墨書。ヒノキ。	”	”
第10図1	” -2	”	直径 41.2 高さ 25.7 厚さ 0.4	上から2段目の枠。倒立で使用。ヒノキ。	”	”
” 2	” -3	”	直径 39.8 高さ 28.1 厚さ 0.3	上から3段目の枠。倒立で使用。ヒノキ。	”	”
第11図1	図版23b-3	瓦器椀	口径 15.0 高さ 5.4 厚さ 0.7	上から5段目の枠内出土。高台磨滅。和泉型。	”	”
” 2	図版24a-1	”	口径 15.6 高さ 5.7 厚さ 0.6	上から3段目の枠内出土。土師器風。完形。重さ218g。	”	”
” 3	”	”	口径 15.2 高さ 4.7 厚さ 0.5	上から2段目の枠内出土。破片。	”	”
” 4	”	瓦器椀	口径 15.8 高さ 5.0 厚さ 0.5	上から2段目の枠内出土。風化著しい。破片。	”	”
” 5	図版24a-2	”	口径 14.9 高さ 5.9 厚さ 0.7	上から5段目の枠内出土。ほぼ完形。重さ230g。	”	”
” 6	図版23b-2	瓦器小皿	口径 10.1 高さ 2.2 厚さ 0.7	上から4段目の枠内出土。完形。重さ78g。	”	”
” 7	図版23a-2	土師器小皿	口径 9.1 高さ 1.7 厚さ 0.7	枠上の埋土から出土。茶褐色。粗製。半分。	”	”
” 8	” -4	”	口径 10.4 高さ 2.0 厚さ 0.6	上から1段目の枠内出土。灰白色。小破片。	”	”
” 9	” -5	土師器中皿	口径 12.5 高さ 2.5 厚さ 0.5	上から3段目の枠内出土。灰褐色。破片。	”	”

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	特徴	時期	出土遺構
第11図10	図版23 b - 1	土師器 中皿	口径 15.5 高さ 2.6 厚さ 0.7	上から4段目の枠内出土。灰黄茶色。大破片。	平安末期	1区 井戸1
” 11	”	”	口径 15.6 高さ 2.7 厚さ 0.8	枠上の埋土から出土。灰茶色。大破片。	”	”
” 12	図版24 b	須恵器 ねり鉢	口径 32.0 高さ 12.7 厚さ 0.9	上から3段目の枠内出土。東播磨産。灰色。大破片。	”	”
第13図1	”	土師器 小皿	口径 10.2 高さ 2.2 厚さ 0.7	小石・砂粒を多数含有。風化著し。破片。	鎌倉	1区 ビット4
” 2	図版22 a - 3	瓦器 小椀	口径 9.6 高さ 2.1 厚さ 0.5	内・外面に暗文。	”	1区 床土層
” 3	” - 4	瓦器 椀	口径 12.3 高さ 3.2 厚さ 0.4	断面三角の高台。暗灰色。大破片。	”	”
” 4	図版22 b - 1	黒色土器 椀	口径 16.1 高さ 5.5 厚さ 0.6	口縁端部内面に浅い凹線。大破片。	平安後期	1区 土坑1
” 5	”	”	底径 7.5 高さ 1.3 厚さ 0.6	4と同一個体?	”	”
” 6	図版22 b - 3	土師器 鍋	口径 15.8 高さ 7.8 厚さ 0.6	赤茶褐色。外面は部分的に煤ける。	”	”
” 7	図版28 b	弥生土器 壺	高さ 7.5 幅 7.5 厚さ 0.5	肩部に竹管刺突文。上げ底。灰茶色。口縁端部を欠く。	弥生後期	2区 溝1
” 8	図版28 c - 1	弥生土器 鉢	口径 10.6 高さ 6.5 厚さ 0.7	赤褐色。風化著しい。破片。	”	”
” 9	” - 5	弥生土器 甕	幅 5.5 高さ 2.6 厚さ 0.7	灰茶色。風化著しい。破片。	”	”
” 10	” - 2	弥生土器 高杯	脚径 12.2 高さ 3.8 厚さ 0.6	灰褐色。風化著しい。破片。	”	”
” 11	図版28 c - 6	弥生土器 甕	長さ 2.8 幅 4.2 厚さ 0.6	暗茶褐色。生駒西麓産。角閃石・黒雲母含有。	”	”
” 12	” - 7	”	長さ 3.7 幅 6.7 厚さ 0.6	”	”	”
” 13	図版29 a - 1	弥生土器 壺	長さ 3.0 幅 6.7 厚さ 1.0	灰褐色。小破片。	弥生中期	3区 床土層
” 14	” - 2	須恵器 杯蓋	高さ 1.7 幅 3.7 厚さ 0.5	灰色。小破片。	古墳中期	”
” 15	” - 4	須恵器 杯	口径 12.1 高さ 3.4 厚さ 0.5	暗灰色。断面は赤紫色。焼成堅緻。	奈良	”
” 16	” - 5	土師器 小皿	口径 7.4 高さ 1.4 厚さ 0.5	茶色。赤いクサリ礫、多数含有。	鎌倉	”
” 17	” - 6	瓦器 小皿	口径 9.6 高さ 2.2 厚さ 0.6	風化著し。	”	”
” 18	図版29 b - 6	青磁 椀	底径 6.8 高さ 2.1 厚さ 1.1	緑灰色。内面に釉薬。	”	”
” 19	図版30 a - 1	弥生土器 壺	長さ 2.1 幅 3.3 厚さ 0.8	灰茶色。小破片。	弥生中期	4区 床土層
” 20	” - 2	弥生土器 甕	底径 5.0 高さ 3.5 厚さ 1.0	暗茶色。小破片。	”	”
” 21	” - 4	土師器 甕?	長さ 5.8 幅 7.7 厚さ 0.9	黄灰色。外面に格子目叩き。	古墳中期?	”
” 22	” - 5	”	長さ 5.8 幅 6.6 厚さ 1.0	黄灰色。外面横方向にヘラ磨き。21と同一個体?	”	”

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	特徴	時期	出土遺構
第13図23		須恵器 杯蓋	口径 13.7 高さ 1.5 厚さ 0.6	暗灰色。大破片。	奈良	4区 床土層
” 24	図版30b-8	土師器 羽釜	高さ 5.2 幅 7.8 厚さ 1.0	口縁端部を外側に折り曲げる。 煤付着。	鎌倉	”
” 25	図版30a-6	土師器 皿	底径 6.5 高さ 1.6 厚さ 0.5	黄灰色。胎土精良。風化著しい。	平安	4区 床土層
第15図1	図版31a-1	平瓦	長さ 14.8 幅 13.4 厚さ 2.3	黄灰色。外面縄目叩き、内面 布目痕。	鎌倉	”
” 2	図版32d	須恵器 杯蓋	口径 15.4 高さ 4.2 厚さ 0.8	暗灰色。内面に青海波叩きの 痕跡あり。	古墳後期	5区 包含層
” 3	図版32c	須恵器 杯	口径 13.1 高さ 4.1 厚さ 0.5	暗灰色。断面小豆色。破片。	奈良	5区 床土層
” 4	図版33a-1	須恵器 杯蓋	長さ 4.0 幅 4.2 厚さ 0.7	外面に櫛歯6本の刺突文と直 線文。	古墳中期	6区 床土層
” 5	図版33b-1	須恵器 甕	長さ 4.3 幅 5.0 厚さ 0.9	暗灰青色。断面は赤紫色。外 面平行叩き、内面は青海波叩 きの上をナデ。	”	”
” 6	” -2	”	長さ 6.4 幅 7.6 厚さ 0.7	暗灰色。外面の平行叩きには×印 が付加されている。内面は青海波 叩きの上をナデ。	”	”
” 7	” -3	”	長さ 5.9 幅 7.8 厚さ 0.7	暗灰色。外面の平行叩きには縦方 向の刻線が付加されている。内面 は青海波叩きの上をナデ。	”	”
” 8	” -4	瓦器 小皿	口径 9.8 高さ 2.0 厚さ 0.6	底に糸切り痕。	鎌倉	”
” 9	図版35b-6	棒状 土錘	長さ 4.4 幅 1.4 厚さ 1.4	重さ9.3g。1孔。端部に半 円筒状の凹み。茶灰色。	古墳?	5区 床土層
” 10	” -7	紡錘状 土錘	長さ 3.7 幅 1.2 厚さ 1.1	重さ4.1g。完形。灰茶色。	鎌倉?	6区 床土層
” 11	” -8	”	長さ 3.5 幅 1.2 厚さ 1.1	重さ3.7g。完形。赤橙色。	”	4区 床土層
” 12	” -9	”	長さ 3.2 幅 1.1 厚さ 1.1	重さ3.7g。破片。茶褐色。	”	”
” 13	” -10	”	長さ 2.9 幅 0.7 厚さ 0.8	重さ1.2g。完形。小形。灰 茶褐色。	”	”
” 14	” -11	”	長さ 3.7 幅 4.6 厚さ 3.9	重さ49.3g。半分。大形。赤 橙色。	”	”
” 15	” -5	製塩土器 鉢	長さ 7.4 幅 4.7 厚さ 1.2	手づくね。赤橙色。	奈良	5区 床土層
” 16	図版35a-4	須恵器 イダゴ壺	長さ 4.2 幅 3.9 厚さ 4.1	吊り下げ部の断面が方形。灰 色。	古墳?	6区 床土層
” 17	図版35b-3	”	長さ 6.6 幅 6.2 厚さ 0.7	灰色。破片。	”	”
” 18	図版35a-1	土師器 イダゴ壺	長さ 5.0 幅 5.6 厚さ 4.2	吊り下げ部の断面が楕円形。 赤褐色。	”	5区 床土層
” 19	図版35b-2	”	長さ 7.5 幅 6.9 厚さ 0.7	クリーム色。丸くふくらむ。	”	4区 床土層
第16図1	図版36a-3	石鏃	長さ 3.4 幅 1.5 厚さ 0.4	暗灰色サヌカイト。凹基式。 重さ1.4g。	弥生前期?	4区 包含層
” 2	” -6	”	長さ 3.0 幅 1.9 厚さ 0.4	暗灰黒色サヌカイト。凹基式。 重さ1.4g。	縄文?	6区 床土層
” 3	” -2	”	長さ 2.5 幅 1.7 厚さ 0.3	暗灰色サヌカイト。凹基式。 重さ1.4g。	弥生前期?	4区 床土層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	特徴	時期	出土遺構
第16図4	図版36 a - 1	石鏃	長さ 2.4 幅 1.4 厚さ 0.3	暗灰色サヌカイト。凹基式。重さ0.9g。	縄文晩期	3区 床土層
" 5	" - 7	"	長さ 2.1 幅 1.4 厚さ 0.3	暗灰黒色サヌカイト。凹基式。重さ0.7g。	"	7区 包含層
" 6	" - 4	"	長さ 2.1 幅 1.2 厚さ 0.3	黒色サヌカイト。凹基式。片脚のみ。	縄文?	4区 床土層
" 7	" - 5	"	長さ 3.1 幅 1.8 厚さ 0.4	暗灰黒色サヌカイト。凸基式。重さ2.0g。	弥生中期	6区 床土層
" 8	図版36 a - 8	"	長さ 4.4 幅 2.7 厚さ 0.6	暗灰黒色サヌカイト。凸基有茎式。重さ5.1g。	弥生中期	6区 床土層
" 9	" - 10	石錐	長さ 3.6 幅 3.1 厚さ 1.0	暗灰黒色サヌカイト。風化著しい。重さ8.5g。	縄文?	5区 床土層
" 10	" - 11	不定形刃器	長さ 3.9 幅 1.9 厚さ 1.1	暗灰色サヌカイト。断面ある石器。重さ7.6g。	縄文	2区 溝1
" 11	" - 12	"	長さ 4.7 幅 5.8 厚さ 1.0	背部に表皮残存。暗灰色サヌカイト。重さ32.5g。	弥生中期	5区 包含層
" 12	" - 9	翼状剥片	長さ 1.1 幅 2.4 厚さ 0.4	灰白色サヌカイト。重さ0.9g。	旧石器	3区 床土層
" 13	図版36 b - 1	剥片	長さ 2.7 幅 3.1 厚さ 0.4	灰白色サヌカイト。金山産? 重さ3.2g。	縄文?	4区 床土層
" 14		"	長さ 3.1 幅 4.0 厚さ 0.8	暗灰色サヌカイト。重さ7.1g。	"	"
" 15		"	長さ 2.1 幅 2.8 厚さ 0.8	暗灰黒色サヌカイト。重さ3.7g。	弥生	5区 床土層
" 16		"	長さ 1.9 幅 2.5 厚さ 0.2	暗灰黒色サヌカイト。重さ0.8g。	"	4区 床土層
" 17		"	長さ 2.0 幅 1.8 厚さ 0.4	暗灰黒色サヌカイト。重さ1.3g。	"	"
" 18		"	長さ 2.9 幅 2.6 厚さ 0.7	暗灰黒色サヌカイト。重さ4.7g。	"	"
" 19		"	長さ 2.9 幅 3.3 厚さ 0.6	暗灰黒色サヌカイト。重さ5.8g。	"	6区 床土層
" 20	図版36 b - 2	礫	長さ 4.2 幅 6.4 厚さ 2.5	暗灰色サヌカイト。転石。重さ67.1g。	弥生?	5区 床土層
" 21	" - 3	砥石	長さ 5.3 幅 5.2 厚さ 1.2	灰緑石粘板岩	鎌倉?	4区 床土層
" 22	" - 4	磨石	長さ 10.4 幅 3.8 厚さ 2.6	灰色安山岩。重さ132.3g。擦り傷一面に付着。	"	"

図

版

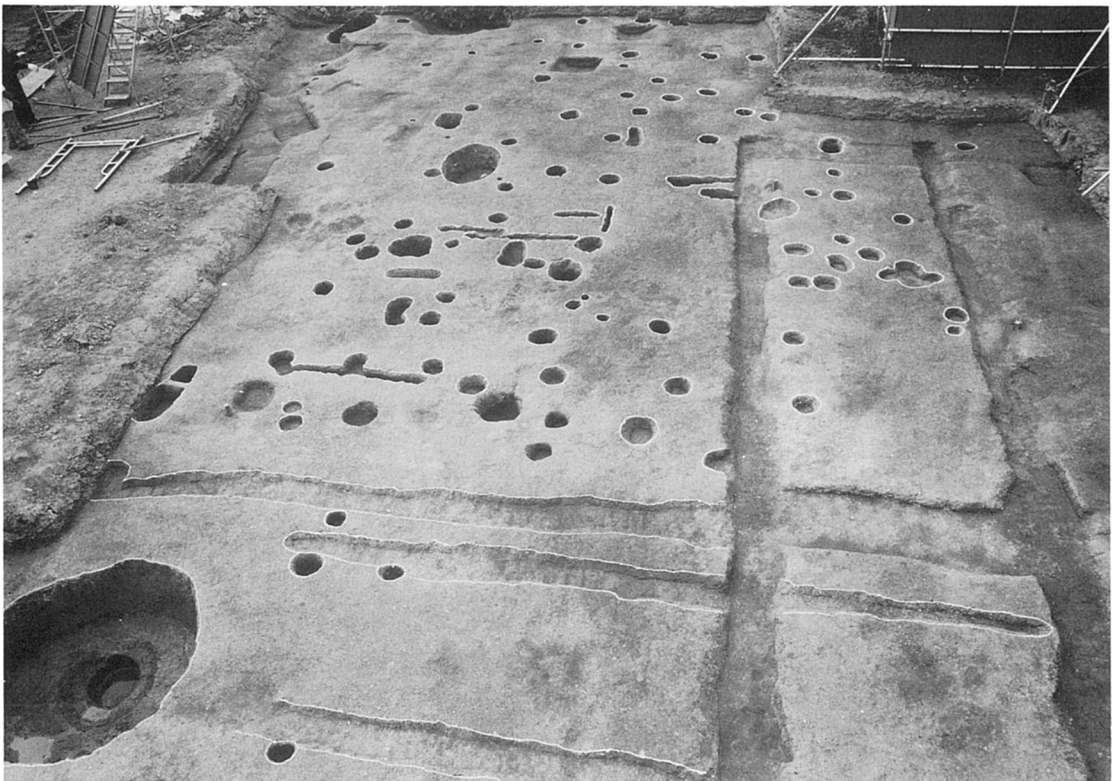


図版1、吉井遺跡周辺航空写真

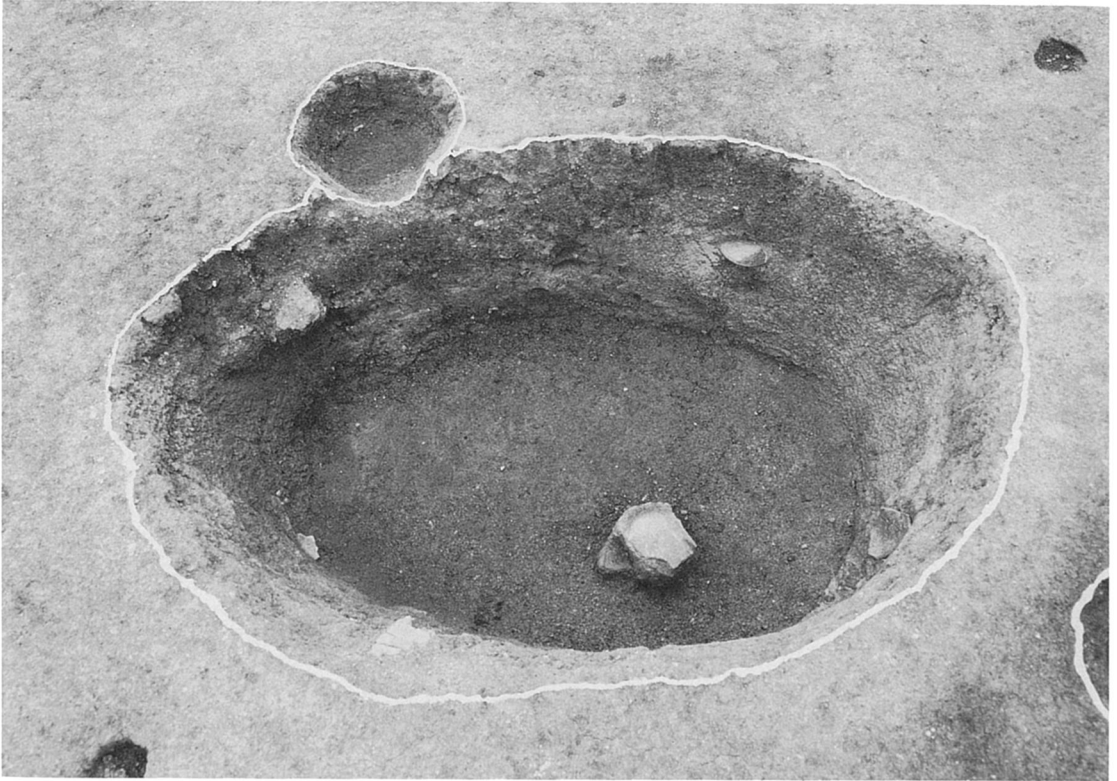




a. 全景 (左上が北)



b. 全景 (南東から)



a. 土坑1 (3-00) 全景 (南から)



b. 井戸1 (1-0W) 全景 (東から)



a. 井戸1 曲物棹内遺物出土状況（東から）



b. 井戸2 (2-O W) 全景（南から）



a. 全景 (右上が南)



a. 溝1 (18-O S) 全景 (南東から)



b. 溝1 (18-O S) 全景 (西から)



a. 全景（南東半分）



b. 全景（北西半分）



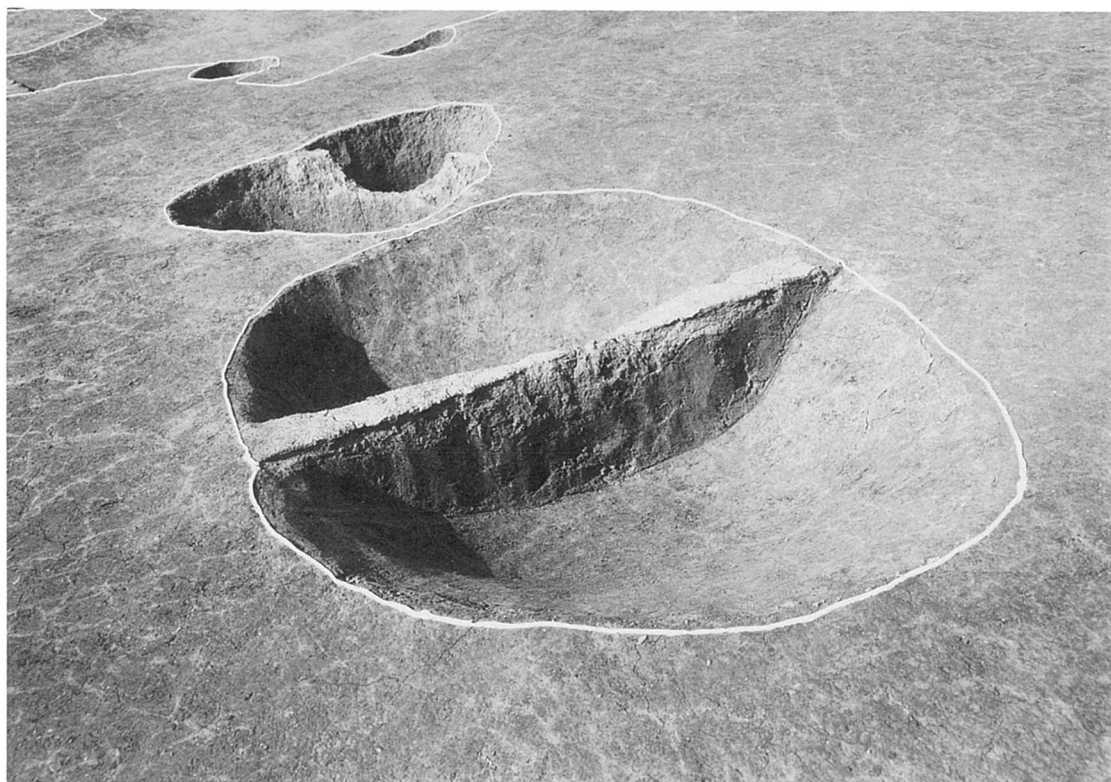
a. 溝1 (45-O S) 断面 (北から)



b. 溝1 (45-O S) 全景 (東から)



a. 土坑群（西から）



b. 土坑群（東から）



a. 土坑群検出状況（北から）



b. 土坑群（北から）



a. 全景（南東半分）



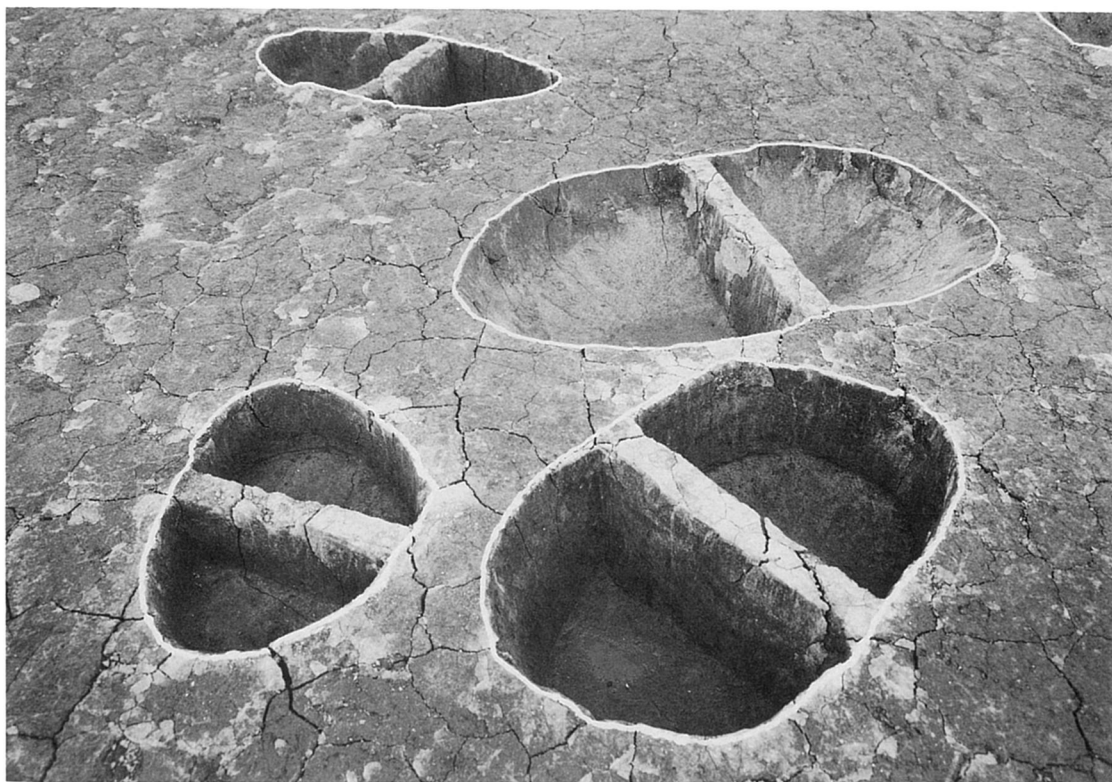
b. 全景（中央部分）



a. 全景 (北西半分)



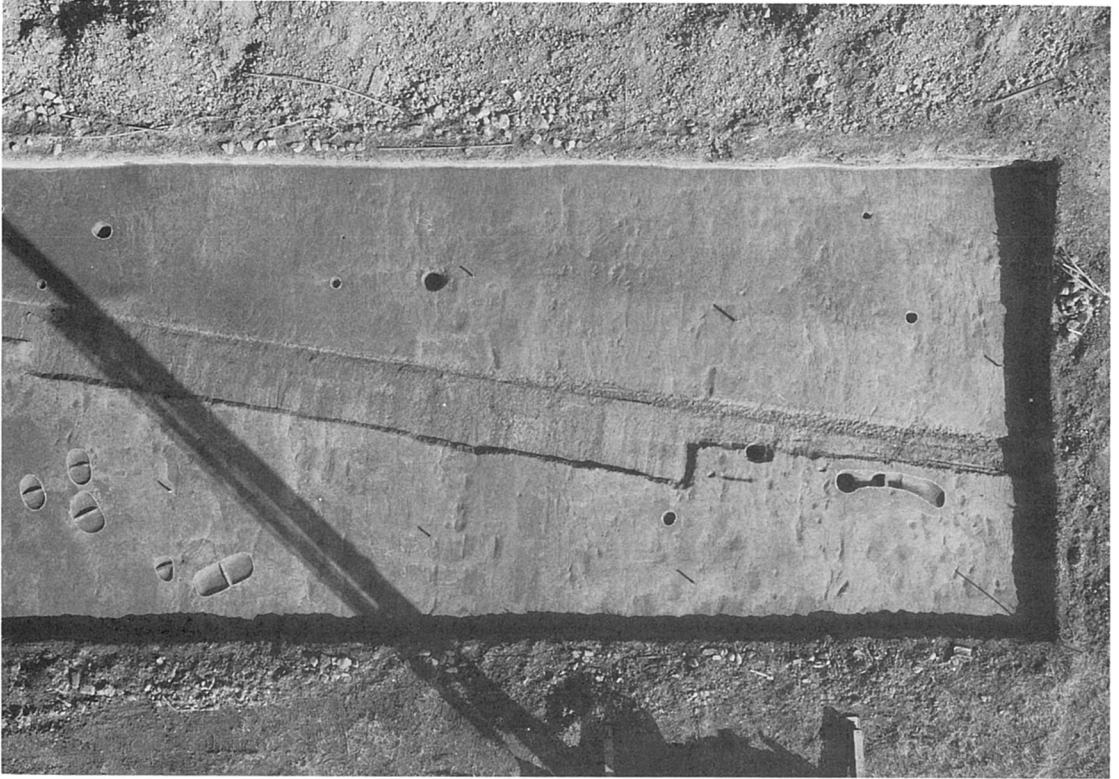
b. 土坑群 (西から)



a. 土坑群（東から）



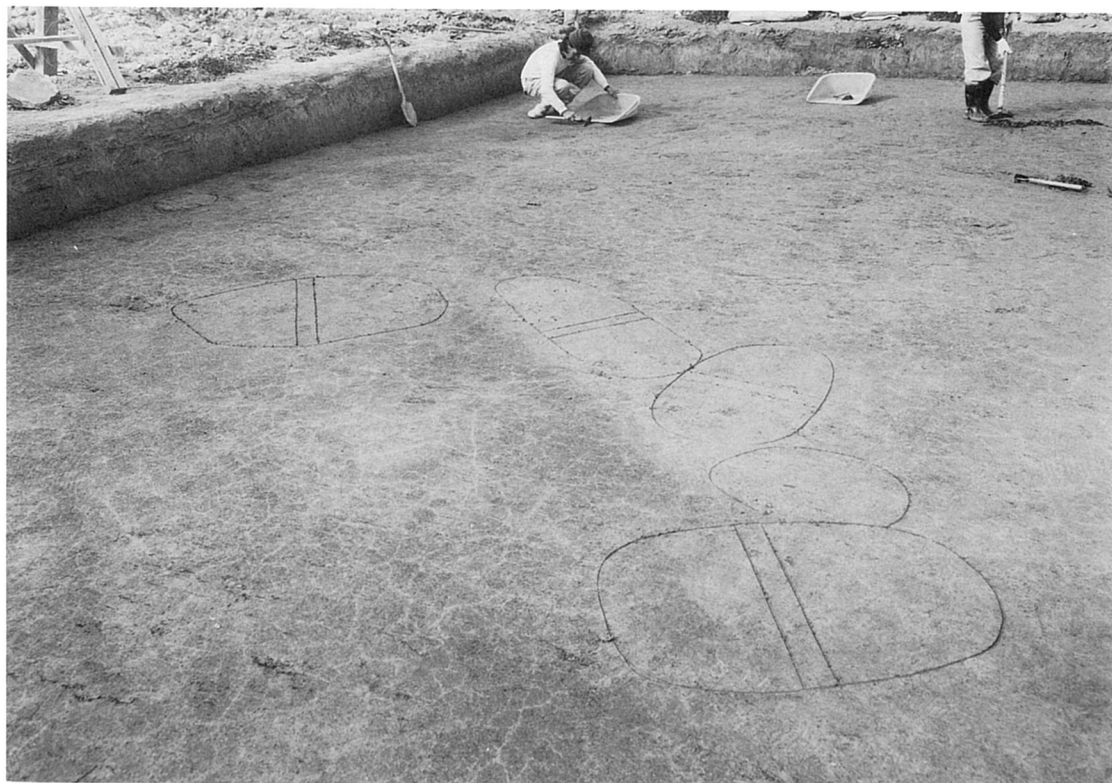
b. 土坑群（北東から）



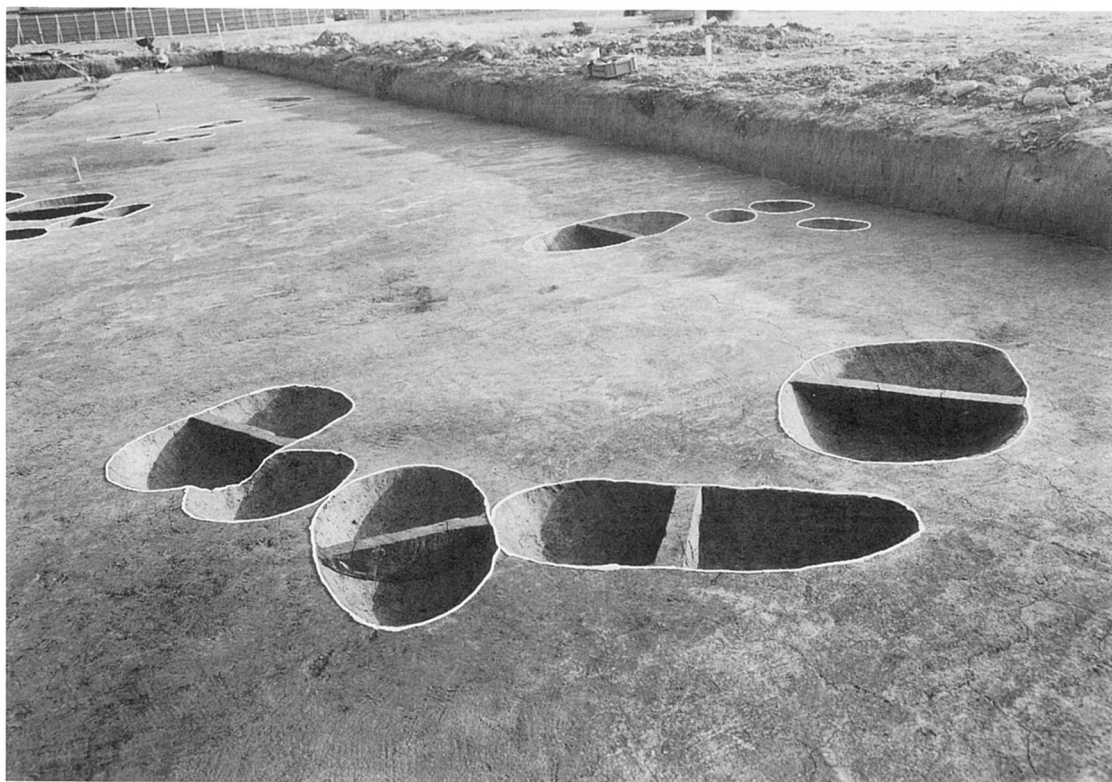
a. 全景（南東半分）



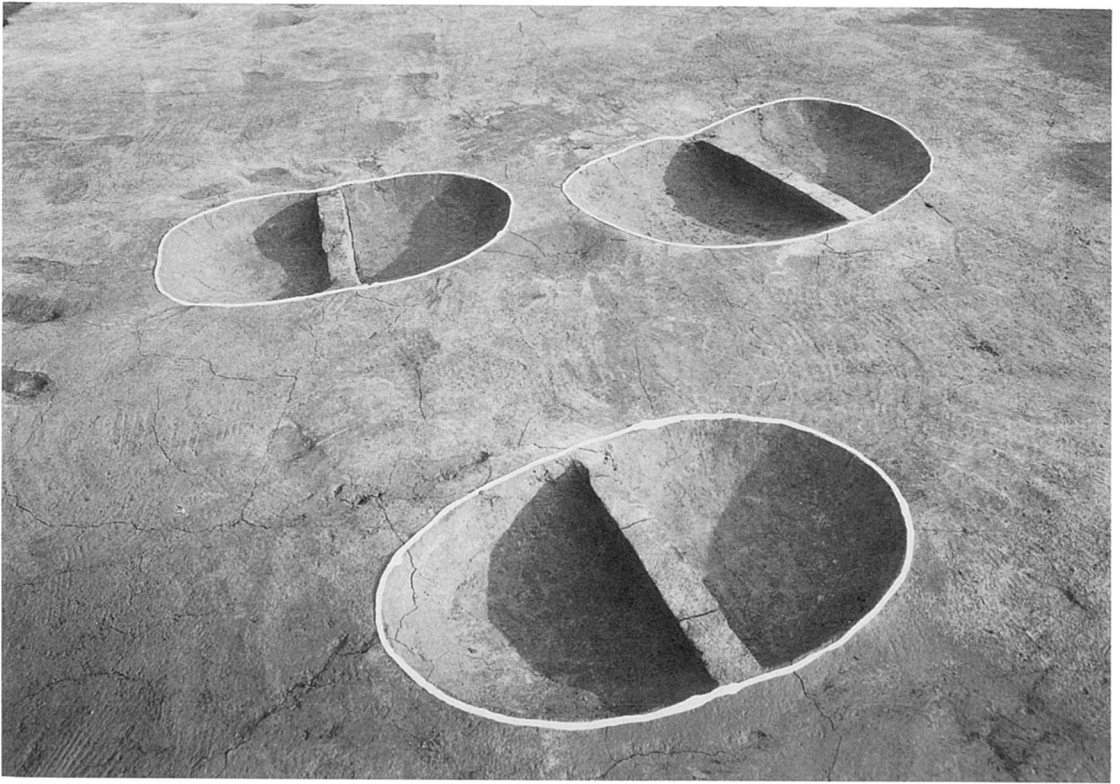
b. 全景（北西半分）



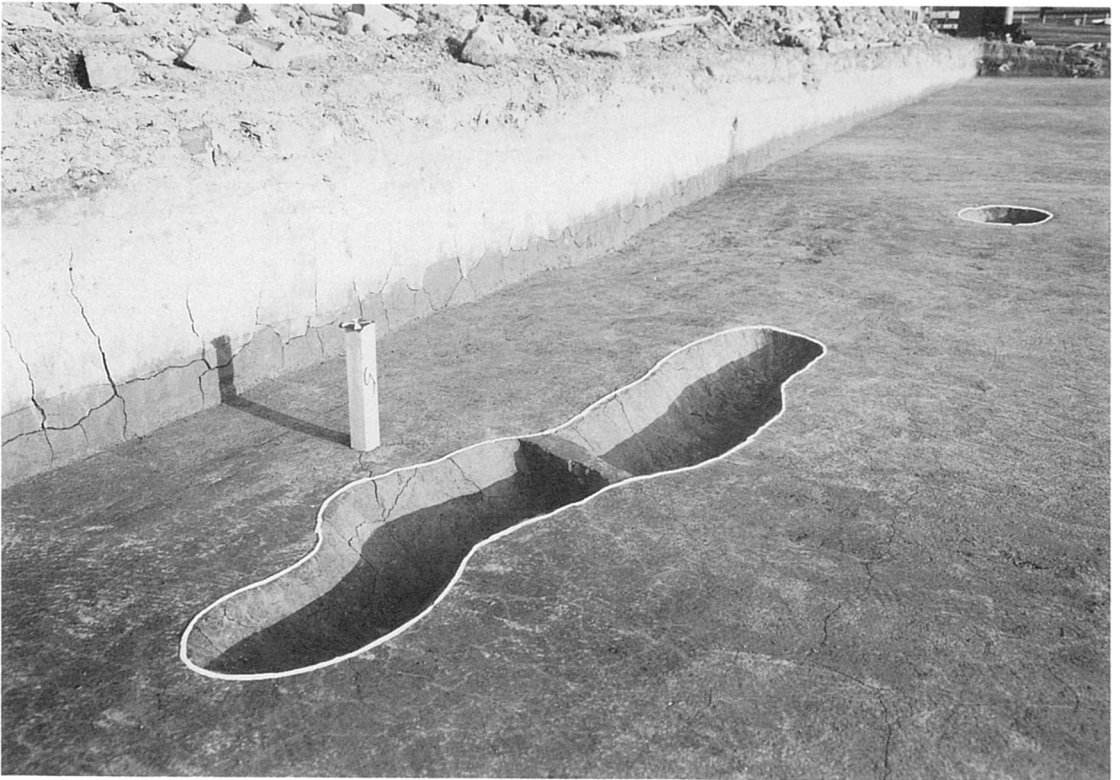
a. 土坑群検出状況（東から）



b. 土坑群（北から）



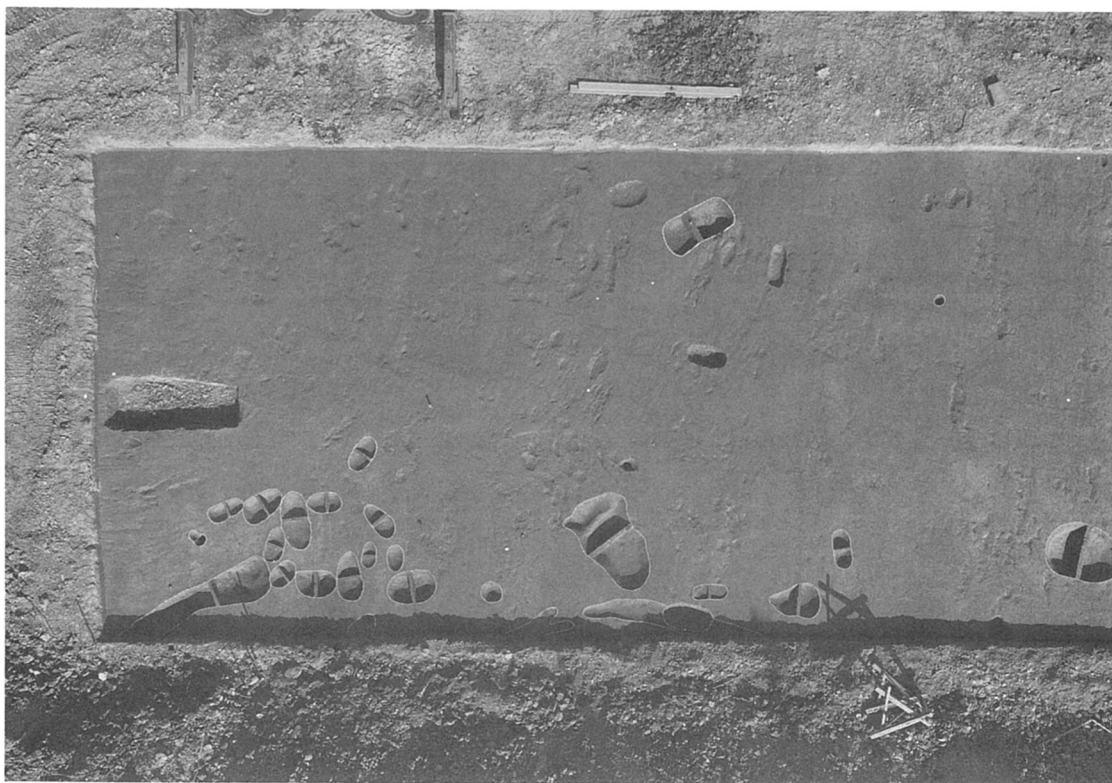
a. 土坑群（西から）



b. 調査区北東断面（西から）



a. 全景 (南東半分)



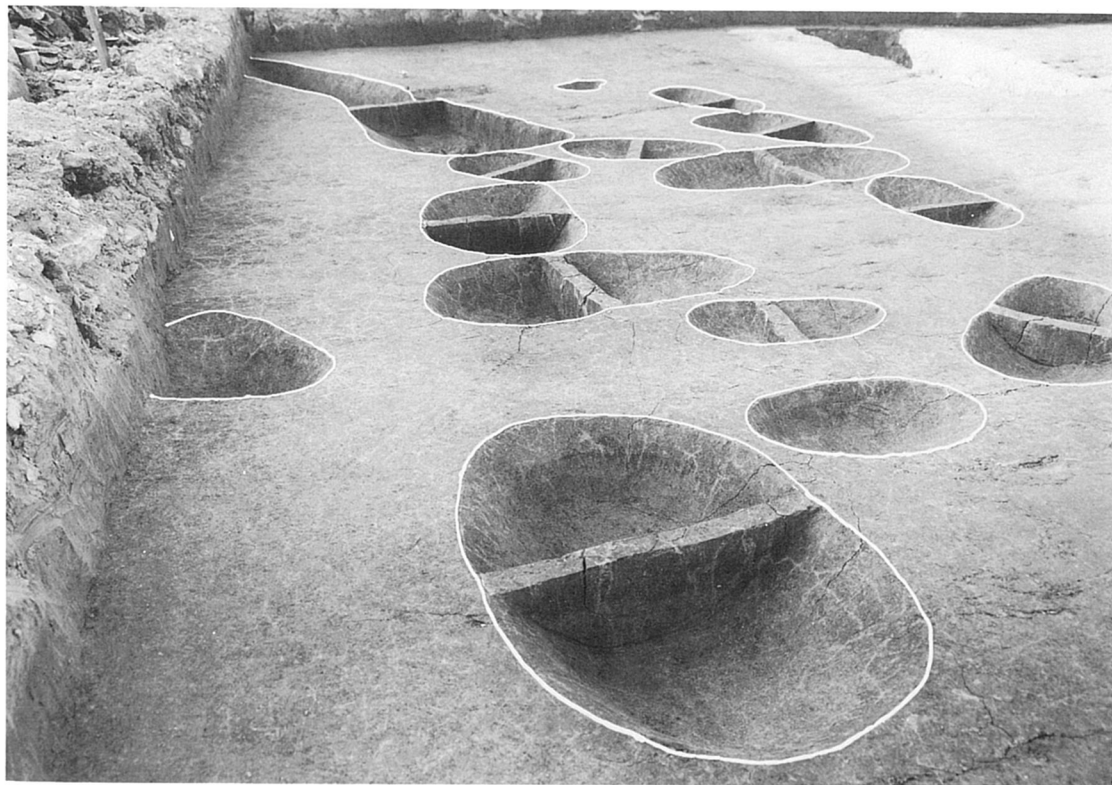
b. 全景 (北西半分)



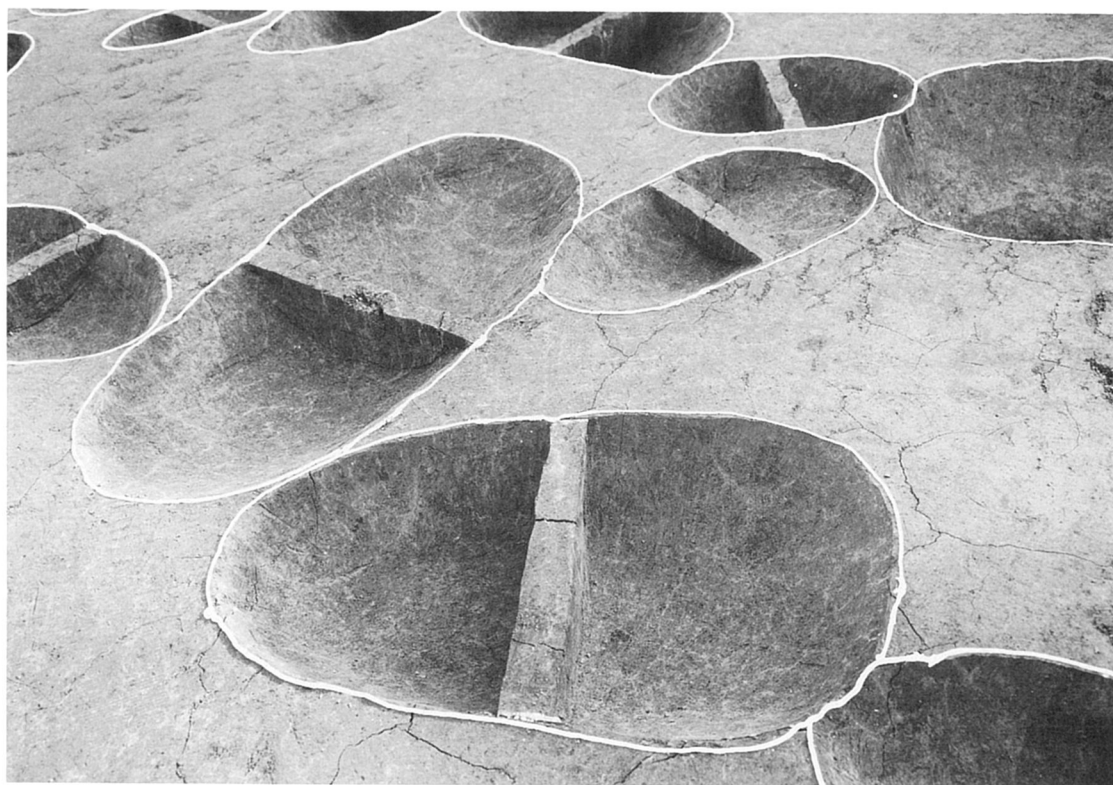
a. 全景（南東から）



b. 土坑群（南東から）



a. 土坑群 (南東から)



b. 土坑群 (北から)